

昭和56
年 度 平城宮跡発掘調査部
発掘調査概報



1982

12

奈良国立文化財研究所

凡 例

1. 本書は、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部が、昭和56年度に行なった平城宮跡および京内遺跡の発掘調査の概要報告である。
2. 第134次の奈良女子大学構内、第137次の右京二条二坊十六坪、次数外の西市、防災工事にともなう法隆寺境内、の4ヶ所における発掘調査成果に関しては、各々別途に概報を発行する予定なので、本書には収録していない。
3. 遺構図に示した座標値は、平城宮内遺構の場合は平城方位に基づいた座標値、平城京内遺構の場合は国土座標値、薬師寺南門遺構の場合は伽藍中軸に基づいた座標値である。なお、平城方位とは第2次内裏内郭をめぐる築地回廊の北面北雨落溝の方向に基づくもので〔『平城宮報告』VII〕、宮内各所に設けた基準点を(O.O)とし、東西南北をEWSNとして正数(単位m)で表示。
4. 遺構図には、遺構ごとに一連の番号を付し、その前にSA; 築地・塀・柵、SB; 建物、SD; 溝・濠、SE; 井戸、SF; 道路、SK; 土壙、SS; 足場・棚、SX; その他、などの分類記号を示した。

目 次

第1部 平城宮の調査

I	推定第2次内裏北方官衙地域の調査（第129次）	3
II	南面大垣—朱雀門東—の調査（第130次）	10
III	大極殿後殿の調査（第132次）	14
IV	南面西門（若犬養門）の調査（第133次）	23
V	推定第1次朝堂院地区東南隅の調査（第136次）	29

第2部 平城京の調査

I 平城京左京の調査

1.	左京一条三坊二坪—木取山古墳—の調査（第131—8次）	36
2.	左京一条三坊十六坪の調査（第131—13次）	38
3.	左京二条二坊十三坪の調査（第131—31次）	39
4.	左京二条四坊九坪の調査（第131—16次）	43
5.	左京三条四坊三坪の調査（第138次）	46
6.	左京三条四坊七坪の調査（第131—30次）	48

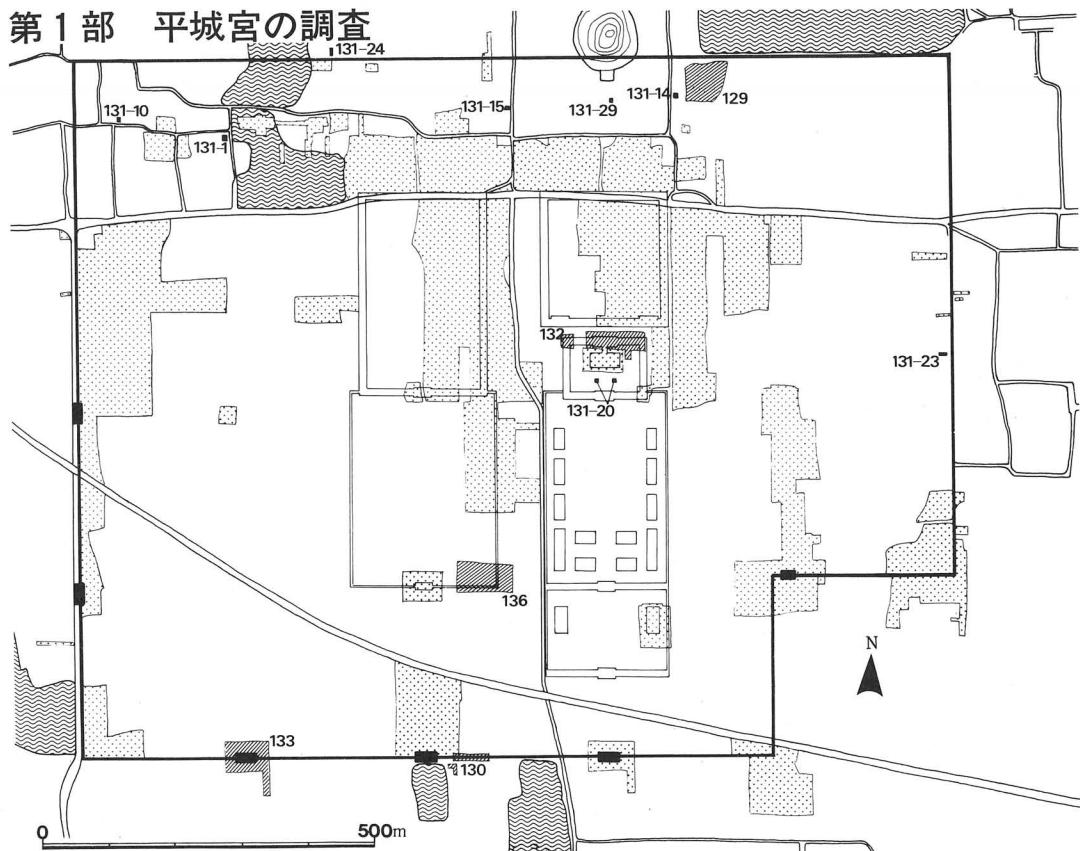
II 平城京右京の調査

1.	右京一条二坊二坪の調査（第131—2次）	49
2.	右京六条一坊九坪の調査（第131—28次）	50
3.	右京六条一坊十四坪の調査（第131—9次）	51
4.	右京六条三坊四坪の調査（第131—7次）	52
5.	右京七条二坊十五坪の調査（第135次）	53
6.	右京九条一坊十二坪の調査（第125次補足）	56

III 京内寺院の調査

1.	西大寺境内の調査	57
2.	西大寺東塔の調査	58
3.	薬師寺南門付近の調査	60

第1部 平城宮の調査



第1図 昭和56年度 平城宮跡発掘調査地一覧（※は本書に収録）

次 数	調 査 地 区	面 積	調 査 期 間	備 考
※129	第2次内裏北方官衙	3000 m ²	'81 3.26 ~ 7.15	
※130	朱雀門東の南面大垣	560	6. 5 ~ 7.17	
131-1	宮内(佐紀池西北)	佐紀町2641-1	10.3	4. 6 ~ 4. 7
10	宮内	佐紀西町		戸尾林太郎氏宅
14	宮内(水上池南西)	佐紀町2190	2.3	8. 6
15	宮内(宮北部)	佐紀中町 1-2765-1	7	野村秀雄氏宅
20	大極殿院内		9. ~ 9.29	県植樹祭
23	宮内(東院東端)	法華寺中町 667	15	10. 6 ~ 10. 8
24	宮内(北面大垣塙地)	佐紀町2826-1	28	10. 7 ~ 10.13
29	宮内(平城陵南)	佐紀町 2202-3	13	11. 9
※132	大極殿後殿		2500	6.18 ~ 9.30
※133	南面西門		2700	11.1 ~ '82 2.8
※136	第1次朝堂院東南隅		2800	'82 1.7 ~ 4.24

I 推定第2次内裏北方官衙地域の調査（第129次）

調査区は推定第2次内裏北外郭官衙地域の東北方で、平城宮北面大垣のすぐ南に位置する。地形的には南にのびる支丘の東縁にあたり、東側が大きな谷になる。北には北面大垣の位置にあたる堤防をへだてて水上池がある。

遺構

調査区の土層は上から旧耕土・床土、茶褐色粘質土（約20cm）、礫混り灰褐色砂質土（20～40cm）、黄灰褐色粘質土（10～20cm）及び地山の黄褐色粘質土に区分できる。このうち、礫混り灰褐色砂質土は調査区西辺をのぞいてほぼ全体にあり、東に厚い。奈良時代のほか中世の遺物を含む。黄灰褐色粘質土は調査区中央部から南辺にかけて残る奈良時代当初の整地土である。主な遺構はこの整地土及び地山面で検出した。検出面は東及び南に向って低くなっている。比高差は西と東で約2m、北と南で約0.5mである。

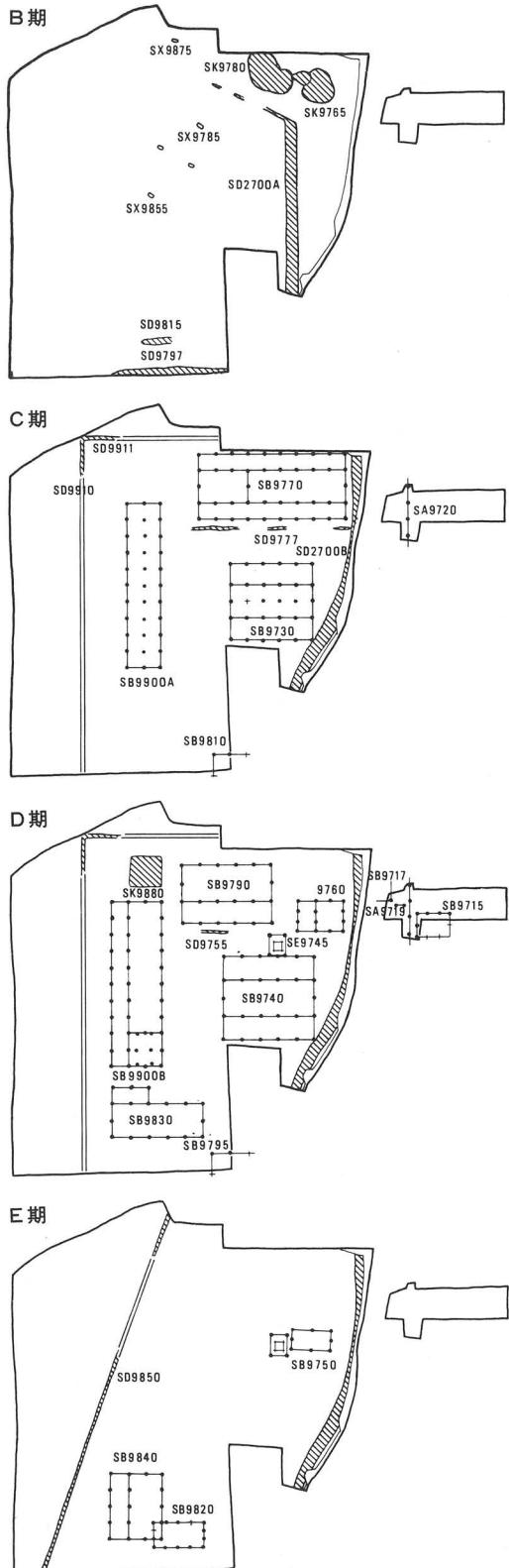
検出した主な遺構は掘立柱建物16棟、掘立柱塀2条、溝11条、井戸1基、焼土ピット5基、土壙9基などである。これらは奈良時代を中心としてそれに前後する時期に属し、遺構の新旧関係や配置などから大きく5期に区分できる。

A期 調査区北東部に溝2条（SD 9766・9775）、土壙4基（SK 9726・9735・9738・9742）があるが、まとまりに欠ける。

SD 9775は幅約0.6m、深さ約0.2mの東西構で、西に流れる。底に小礫をまばらに敷いている。SK 9735は東西約8.7m、南北約9.9m、深さ約0.4mの不整形な土壙である。黄灰褐色粘土質で埋めているが、底に暗灰色粘土質の堆積があり、一時期滯水していた可能性がある。

B期 南北大溝SD 2700 Aと東西溝2条（SD 9797・9815）を設けた時期。焼土ピット5基（SX 9785・9855・9860・9870・9875）、土壙5基（SK 9761・9765・9780など）はこの時期に属するが、建物はない。

SD 2700 Aは第21次調査で検出している玉石積の東大溝SD 2700の北端部にあたる。素掘りである。幅約2.0m、深さ約0.5m。北端は西に折れ、幅0.3m



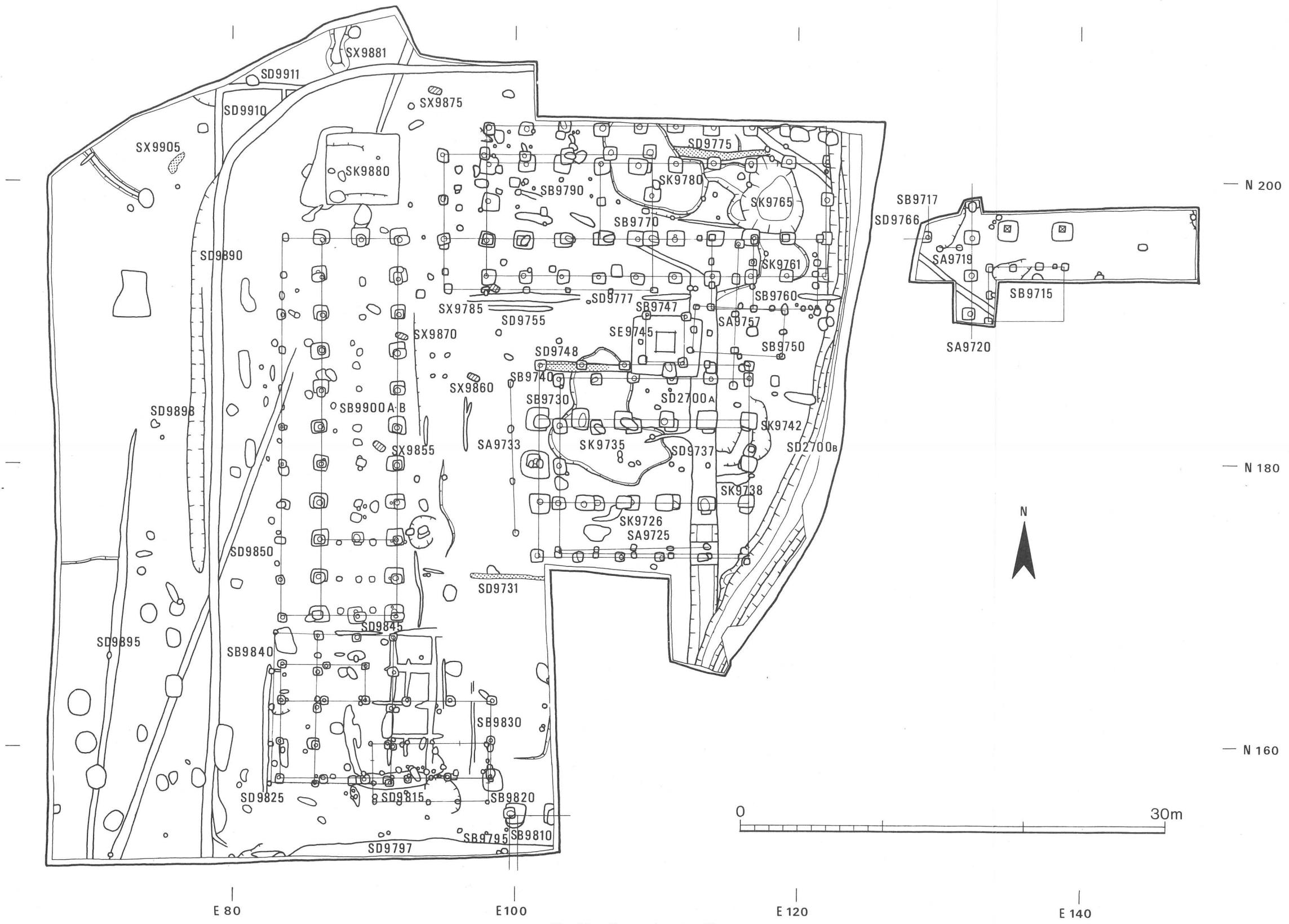
第2図 第129次調査遺構変遷図

と細くなる。底にはわずかに暗青灰色砂質土の堆積があるが、短期間で埋め戻している。SD 9797とSD 9815は調査区南端を平行して東に流れる。SD 9797は幅約1.1m、深さ約0.2m。SD 9815は幅1.2m以上、深さ約0.2m。両溝の間（約3.5m）は道路かもしれない。

焼土ピット5基は調査区北辺に5～12mの間隔をおいて散在する。平面形はいずれも隅丸の長方形である。底はほぼ平坦で、側壁は幾分上に向って開く。側壁と底の一部は赤く焼けており、底には炭・灰が厚いもので20cmほど堆積している。遺存状態の良いSX 9875は長さ約1.0m、幅約0.5m、深さ約0.5mである。用途は明らかでない。

土壙5基は調査区北東部にあり、いずれも埋土にかなりの量の炭・灰、及び焼土を含む。焼土ピットの炭・灰を廃棄したのであろう。SK 9780は 6.6×6.0 m以上、深さ約0.6m。

このほか調査区北端で積土の痕跡SX 9881を検出した。付近は攪乱が著しいが、この東約15mの地点で実施した立会調査で高さ約0.8mの積土（大略5層）を後述する東西溝SD 9911付近まで確認した（南北約6m）。また、北面大垣の痕跡である水上池の堤防の南側は、一段低い帯状の高ま



第3図 第129次調査遺構図

りとなっている。SX 9881 は北面大垣 SA 2300 の内側の犬走りなのであろう。

C期 SD 2700 A を SD 2700 B に改め、その東に掘立柱塀 SA 9720 、西に掘立柱建物 4 棟（SB 9730・9770・9810・9900 A）を配した時期である。建物群の北は東西溝 SD 9911 、西は南北溝 SD 9910 で画す。

SB 9730 は南北に廂がつく 5 × 4 間の東西棟。床束の痕跡から身舎は床張りである。柱間は身舎の桁行と梁間が 9 尺等間、廂の出が 12 尺。SB 9770 は南と北に廂がつく 9 × 4 間の東西棟。身舎は西 3 間分を仕切る。柱間はいずれも 9 尺等間。SB 9770 の南約 1.5 m には雨落溝 SD 9777 がある。幅約 0.4 m 、深さ約 0.1 m 。SB 9810 は北側の柱穴列を検出したにすぎないが、東に SD 9800 B が存在すること及び後述する地割の問題から、桁行 4 間（9 尺等間）、梁間 2 間（12 尺等間）の東西棟と推定する。SB 9900 A は 10 × 2 間の床張りの南北棟。柱間は桁行・梁間とも 9 尺等間。SA 9720 は南北塀で、3 間分（9 尺等間）を検出した。

SD 2700 B は最大幅約 2.2 m 、深さ 1.5 ~ 1.7 m の素掘りの大溝。東に現水路があるため一部を発掘した。堆積土は 3 層に大別できる。下層は 6 層あり、下から灰白色砂、黒褐色粘質土、灰色砂、暗灰色砂バラス、暗灰色粘砂土、暗灰色粘質土。中層は 2 層で、下から青灰色砂礫、灰色砂質土。上層は 10 世紀から・中近世紀まで存続する。SD 9910 と SD 9911 は調査区北西部で接続部分を検出した。SD 9910 は幅約 0.5 m 、深さ約 0.2 m 。SD 9911 は幅約 0.4 m 、深さ約 0.2 m 。

この時期の遺構は 9 尺（1 尺 = 29.7 cm ）単位の方眼で地割りし、これにあわせて建物を整然と配置している。すなわち、建物群の東西を画す塀 SA 9720 と溝 SD 9910 の心々距離は約 53.5 m （180 尺）。南限は不明だが、北を画す溝 SD 9911 心と SB 9810 の推定南側柱列までの距離は約 58.8 m （198 尺）に復原でき、さらに SB 9810 の南北中軸線は SA 9720 と SD 9910 間の南北中軸線にそろえている。

他の建物 3 棟は南北方向が 9 尺方眼地割にのる。SB 9730・9770 は中軸線と柱筋をそろえて南北に並び、SB 9900 A は北妻が SB 9770 の身舎南側柱列、東西中軸線が SB 9730 の身舎北側柱列にそろう。また、SB 9730 の身舎南側柱列は、SD 9911 と SB 9810 の南側柱列間の東西中軸線上に位置する。ただし、東西方向は

9尺方眼地割に対してSB 9730・9770が東に1尺、SB 9900 Aが西に2尺ずれる。SB 9730・9770の南北中軸線は、SA 9720とSD 9910間の南北中軸線より東約4.3m(14.5尺)にある。

D期 C期の建物4棟をほぼ同位置でSB 9740・9790・9795・9900 Bに建て替え、新に小規模な建物4棟(SB 9715・9717・9760・9830)と井戸SE 9745を設けた時期。SA 9720、SD 2700 B・9910・9911はこの時期にも存続する。

SB 9740は南と北に廂がつく5×4間の東西棟。東妻及び身舎南側柱筋はC期のSB 9730の位置を踏襲する。柱間は身舎の桁行・梁間が10尺等間、廂の出が13尺。SB 9790は南に廂がつく5×3間の東西棟。身舎南側柱筋はC期のSB 9770の位置を踏襲する。柱間は身舎の桁行・梁間が10尺等間、廂の出が12尺。SB 9790の南約1.3mには雨落溝SD 9755がある。幅約0.2m、深さ約0.1m。SB 9760は3×3間の東西棟で、西1間を仕切る。北側柱筋はC期のSB 9770の位置をほぼ踏襲する。柱間は桁行が西から10尺、7.5尺、7.5尺、梁間が5.5尺等間。SB 9795は北側の柱穴列を検出したにとどまる。C期のSB 9810と同様に4×2間の東西棟と思われる。柱間は桁行が10尺等間、梁間が12尺等間になろう。

SB 9900 BはC期のSB 9900 Aと同じ位置で建て替え西に廂をつけた10×3間の南北棟。身舎の南2間分を仕切り、この部分だけ床張りとする。廂の出は9尺。SB 9840は5×2間の東西棟で、西2間分だけ庇が付く。柱間は身舎の桁行が10尺等間、梁間が9尺等間。廂の出は9尺。SB 9715・9717は調査区北東部にある。SB 9715は3×2間の東西棟。柱間は桁行が6尺等間、梁間が6.5尺等間。SB 9717は東南隅の柱穴を検出したにとどまる。西にSD 9800 Bがあり、小規模な南北棟と考えられる。この東に東西1間(10.5尺)の掘立柱塀SA 9719がある。

SE 9745はSB 9740の北にある方形の井戸で、井戸屋形SB 9747をともなう。井戸枠は幅約27cm、厚さ約5cmの板材を井籠組にする。8段まで残っていた。一辺約1.3m。井戸掘形は5.1×4.3m前後、深さ約2.7m。底は井戸枠ぎりぎりに1段(深さ約35cm)掘り下げている。SB 9747は1×1間。柱間は南北が11尺、東西が9尺。北東と東南の柱穴には人頭大の石を据えていた。

なお、SB 9900 B の北で 10.6 × 10.2 m 前後、深さ約 0.3 m の方形の土壙SK9880を検出した。底は凹凸がある。埋土は 1 層で、短期間に埋め戻している。

E期 小規模な建物 3棟 (SB 9750・9820・9840) 、溝 1条 (SD 9850) などがある。いずれも平城宮の造営方位と異なる。SD 2700 B 及び SE 9745 はこの時期にも存続する。

SB 9750 は 2 × 2 間の東西棟。柱間は桁行が 10.5 尺等間、梁間が 5.5 尺等間。SB 9840 は西に廂がつく 4 × 3 間の南北棟。柱間は身舎の桁行・梁間が 9 尺等間、廂の出が 10 尺。SB 9830 は SB 9840 の廃絶後に建つ 4 × 3 間の東西棟。柱間は桁行が 7 尺等間、梁間が中央間 6 尺、両脇間 4 尺。

SD 9850 は調査区西辺を南西に流れる幅約 0.6 m 、深さ約 0.5 m の斜行溝である。このほか掘立柱塀 3 条 (SA 9725・9733・9757) はこの時期に属する可能性があるが、性格は明らかでない。SA 9725 は 4 間 (8.5 尺等間) 、SA 9733 は 3 間 (12 尺等間) の南北塀、SA 9757 は 4 間 (9 尺等間) の東西塀である。

遺 物

主として SD 2700 B から木簡、木製品、金属製品、土器及び瓦が出土した。

木簡は計 171 点で、すべて SD 2700 B から出土した。文書木簡、付札、習書がある。このなかには天平 8 年の可能性があるもののほか、天平 12 ~ 19 年の紀年木簡が 6 点ある。以下、主な釈文をかかげておく。

1. 車持宅良

女孺 倭畫師大虫 天平十八年潤九月廿四日

2. 次長 高市息繼 [中臣か] □□

[紀三か] □□□ 安曇廣刀自 □

3. □申陪從□□

4. 南無龍自在王佛

5. 昨夜□□急今□□飛故京千万里誰為送□□ [寒衣か]

6. 参河國□豆郡析嶋海部供奉二月新御贊佐米楚割六斤 [播か]

7. 苦田郡林田郷□大豆五斗進上 [醤か]

8. 備前国邑久郡旧井郷秦勝小國白米五斗

瓦のうち軒瓦は計 117 点で、平城宮第Ⅰ期（和銅元年～養老 5 年）、第Ⅱ期（養老 5 年～天平 17 年）、第Ⅲ期（天平 17 年～天平勝宝年間）のものがある。主体を占めるのは第Ⅱ期の 6225-6663 型式の 1 組（25 点）、第Ⅲ期の 6282-6721 型式の 1 組（46 点）である。

土器には土師器、須恵器及び黒色土器などがある。SD 2700 B からは各器種のほか漆付壺、竈、墨書き土器が出土した。墨書き土器には天平 18 年の紀年と「少属川原藏人」・「舍人安曇万呂」などの人名、「美濃安八郡壬生郷」・「□□道来道□田木郷」などの郡郷名を記した大型の須恵器蓋 1 点のほか、「大膳」、「判」、「井」など 1 字ないし 2 字を記したものなど計 14 点がある。

木製品は SD 2700 B から祭祀具（人形、削り掛け、刀形、鎌形）、容器類（曲物、剝物の箱蓋、籠）のほか、糸巻き、工具柄、杓子、横櫛、桧扇、琴柱及び「天平」の墨書きがある題籠転用品が出土した。また SE 9745 の埋土から削り掛けや曲物の底板が出土した。金属製品は SD 2700 B から墨漆塗りの青銅製鉢及び青銅製尖頭棒が各 1 点出土。錢貨は元祐通宝と寛永通宝各 1 点が出土した。

まとめ

A～E 期の実年代を比定し、あわせて平城宮におけるこの地域の性格について言及しておこう。

まず、D 期の開始時期は建物の柱掘形から平城宮Ⅲの土器、井戸の掘形から平城宮第Ⅲ期の軒瓦が出土していることから天平宝字年間頃に、廃絶期は建物の柱抜取穴から出土した土器によって奈良時代末頃における。C 期は建物の柱抜取穴から平城宮第Ⅲ期の軒瓦が出土しており、D 期の開始直前までつづく。一方、B 期の廃絶期は土壙から平城宮第Ⅱ期の軒瓦が出土していることから大きくは天平年間におけるが、C 期の溝 SD 2700 B 出土木簡からみて天平 12 年頃になる可能性がある。B 期の開始時期は平城宮の造営当初頃に遡ろう。A 期は平城宮の造営以前、6・7 世紀、E 期は平安時代の初め頃に比定できる。

5 期のうち B～D 期が平城宮の存続時期にあたる。このうち、B 期は建物がな

く本格的に利用された状況ではない。C期は東西180尺、南北198尺以上の区画内に9尺方眼地割りにもとづいて整然と建物を配置した時期、D期はこれをほぼ踏襲した時期である。建物群の全体的な配置や性格については、今後の周辺地域の発掘成果をあわせて検討しなければならないが、今回の調査で明らかになった点を記しておこう。

建物群の北はSD 9911が画し、内側の犬走りをへて北面大垣SA 2300に接する。したがって少なくとも今回の調査区においては、北面大垣の南に通路がなかったことになる。SD 9911とSA 2300の心々距離は約9.3m(31.5尺)。SA 2300の基底幅を9尺とすれば、内側の犬走りは幅が27尺になる。

大溝SD 2700BはSD 9911が注ぐ溝としては規模が大きい。さらに、東が谷筋となることから東方から注ぐ溝の存在も考えがたい。現水路がそうであるように、SD 2700BはSA 2300の下を暗渠で抜けている可能性が強い。その場合、現在の水上池は奈良時代にも池であったと考えることができる。SA 2300内側の犬走りの幅が広いのも提防としての役割りを果していたことによるのであろう。

建物群の東を画す塀SA 9720は、内裏東外郭官衙の東西築地SA 705より東約40.2mに位置し、東大溝SD 2700の東にある東方官衙の西面築地SA 2940よりさらに東に位置する。したがって、内裏東外郭官衙の東辺通路は、少なくとも今回の調査区にまで至らず途中で折れ曲っていたことになる。南限は明らかでないが、今回調査した地域は内裏外郭官衙及び東方官衙とは異なる区画割りがおこなわれていたと考える。なお、建物群の西を画すSD 9910の西には遺溝がなく、空間地であった可能性があるが、この建物群に属するのか否かは明らかでない。

C・D期の建物群の性格については、SD 2700B出土の墨書土器及び木簡からある程度推測ができる。すなわち、天平18年の紀年がある墨書土器に記載された「少属川原藏人」には、天平17年中宮職少属から天平18年皇后宮職少属になった「川原藏人凡」(『大日本古文書』2-399、9-139)と同一人物である。木簡に女性の名がかなりみられるのも皇后宮職との関連を暗示する。C・D期の建物群は少なくとも皇后宮職と密接なつながりをもった官司と考えることができよう。

II 南面大垣—朱雀門東—の調査（第130次）

調査地は第16次調査地区（朱雀門）の東、南面大垣および朱雀大路と二条大路の交点の地をふくむ。南面大垣については、第14・16・32・122次の計4次の発掘調査の結果、掘込地業による基底幅9尺の築地壝であると判明している。今回の調査は同地の南面大垣復原整備に先立つもので、遺構の残存状況の確認、大垣に関する詳しい資料の集積、朱雀門近傍の条坊遺構の確認を目的とした。

調査は北地区と南地区とに分けて行なった。北調査区は南面大垣の検出を目的とし、第16次調査区に一部重複させ、東西51m、南北8m、南調査区は条坊遺構の検出を目的とし、東西6m、南北20mのトレノチを設定した。その後の拡張部分を含め、発掘総面積は約560m²である。なお、南調査区は北調査区よりも現地表面が0.6～0.9mほど低い。

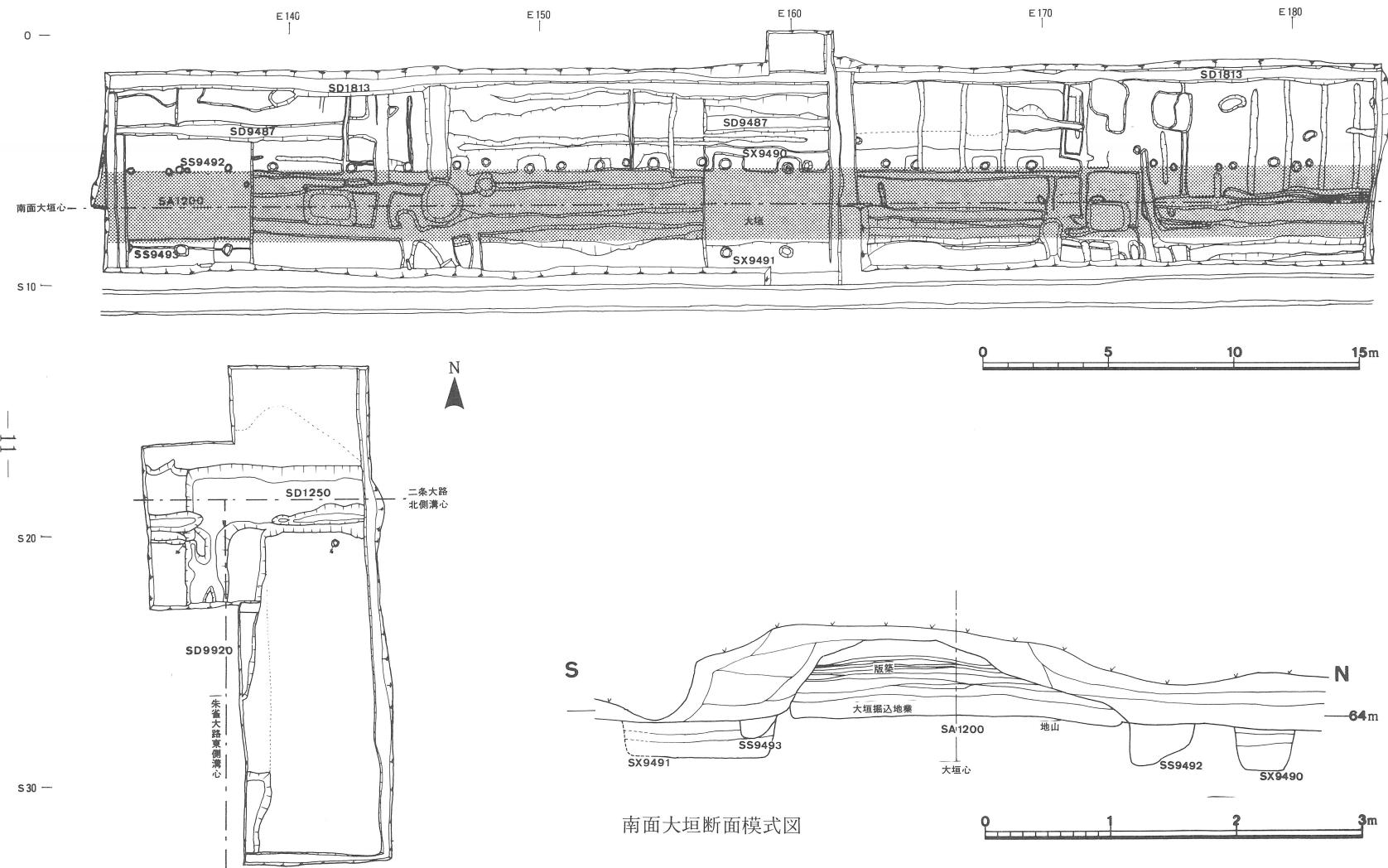
北 調 査 区

現地表下約60cm、床土下が奈良時代の遺構面である。検出した奈良時代の遺構は、南面大垣・東西小柱穴列2条・東西掘込地業2条・東西溝2条である。

南面大垣SA1200は、削平が著しく基底部を残すにすぎない。地山（暗灰色粘質土）を幅9尺にわたって、浅く掘り込んで地業を行なっている。掘り込みの深さは10cm弱で、掘り込みの底から最高25cmの築土が残る。築土は粘質土と砂質土との互層で、各層の厚さは5cm前後の粗い版築を行っている。

大垣の外側に接し、南北各1条の東西方向小柱穴列SS9492・9493がある。柱間は6尺～10尺と不揃いであるが、大垣を狭んだ南北の各柱穴位置は筋が揃っている。柱掘形は径40cm前後と小さく柱抜取り痕跡も径15cmほどである。したがって、築地寄柱や掘立柱壝とは考え難く、大垣の版築の際に堰板を支えた添柱と考えられる。南北添柱の心々距離は約3.3mである。

添柱列とほぼ同位置に、東西方向の掘込地業SX9490・9491がある。大垣北側の掘込地業SX9490は、幅約1m、深さ約20cmで地山面から掘り込んでいる。版築は行なわず、黄褐色砂質土混りの暗灰色粘質土で埋めている。掘込地業SX9490



第4図 第130次調査遺構図（断面模式図は第122・130次調査の所見を合成した）

と添柱列 SS 9492との関係は場所によって異なる。発掘区中央部では、添柱を避けるように平面的に凹凸を設けて掘込地業を行なっているのに対して、西方部では掘込地業の埋土上面から添柱の掘形を掘り込んでいる。東方部は削平が著しく、掘込地業を検出できなかった。

大垣南側の掘込地業 SX 9491は、SX 9490と同様に地山面から約20cm掘り込んでいる。南辺は現代の溝で破壊されている。地業の埋土は地山に似た暗灰色粘土で、SX 9490とは異なる。SX 9491は、発掘区西端と中央部とで確認したにすぎないが、いずれも添柱の掘形は掘込地業埋土上面から掘り込んでいる。

大垣心の北約3.3mの位置に東西溝 SD 9487がある。幅0.4~0.8m、深さ0.2~0.4mで、地山面から掘り込む。埋土はSX 9490の埋土に酷似し、出土遺物や水流の痕跡がないことから、比較的早い時期に廃絶したと考えられる。大垣北側雨落溝の可能性はあるが、溝の北肩の立ち上がりが緩勾配で、溝幅が一定しないことや、SX 9490と同様な埋め戻しをしている点なお検討が必要である。

以上述べた掘込地業 SX 9490・9491、添柱列 SS 9492・9493、東西溝 SD 9487を覆って薄い整地層（黄褐色砂質土）がある。発掘区中央・西部に残り、厚いところで約10cmをはかる。東部では削平されている。この整地層を切って、築地心の北約5.1mの位置に幅0.6m、深さ0.3mの東西溝 SD 1813がある。南面大垣の北を東西に走る宮内道路 SF 1761の南側溝に相当し、同時に大垣から落ちる雨水の排水溝の役割を果す溝と考えられる。埋土上層から多量の瓦片が出土した。軒丸瓦17点、軒平瓦1点はいずれも藤原宮式である。

大垣の南では整地層（黄褐色砂質土）の上に厚さ約30cmの明黄褐色砂質土がある。この層は大垣築土残存部の上も覆っており、ほとんど遺物を含まない。南寄り部分では、南へ向ってやや低くなり、上面にバラスを敷き詰めている。このバラス面は、大垣改修に伴なう第2次の犬走り面と想定できるが、改修の時期を限定できる資料はない。明黄褐色砂質土層の上に厚さ約40cmの盛土（暗黄褐色土）があり、東西道路（現市道）となっている。この層にも藤原宮式軒瓦をはじめとする多量の瓦片を含むほか、中世以降の磁器片が混じる。

南 調 査 区

南区では現地表下約60cmの黄褐色砂質土上面で奈良時代の溝2条を検出した。東西溝SD1250は幅3.5m、深さ0.2～0.4m。南半部は一段深くなっている0.6mをはかる。南面大垣との心々距離は約12mで、二条大路の北側溝に相当し、第32・122次調査の所見と一致する。

南北構SD9920は、SD1250に取り付き幅3.2m、深さ0.4mをはかる。朱雀大路東側溝に相当し、朱雀門からの心々距離37.7m。大路幅は側溝心々で75.4mと推算できる。昭和49年に奈良市が実施し、当研究所が協力した柏木町・六条町での調査結果72mに比べてやや広いことになる。

SD1250・9920の堆積はおおむね3層に分かれる。溝交点付近では最下層（暗灰色粘質土）から、木簡2点・人形3点・曲物1点が出土した。木簡は判読できない。そのほかに両溝から、平城宮瓦編年第I・II期に属する軒丸瓦4点、軒平瓦3点が出土した。

なお、SD1250の北側で、二条大路造営前の旧河川と考えられる灰色粗砂層を検出した。西北から東南にかけて斜行し、小量の自然木細片を含む。幅・深さ等は確認しなかった。北調査区ではこの旧河川の延長は検出されていない。

ま と め

北調査区、特に東半部では後世の削平が著しく、中世～現代にかけての土壌や溝によって奈良時代の遺構はかなり破壊されていた。しかし、従来の調査成果を再確認するとともに、掘込地業SX9490と添柱列SS9492との前後関係が場所によって異なることから、仕事上の手順が一様でないことが判明した。また、大垣の形式についても寄柱の有無が問題であったが、今回調査の結果からは、やはり寄柱を用いなかったと推定できた。さらに、大垣改修の可能性が生じてきたことは今後に大きな課題を残すことになった。

南調査区では、朱雀大路の側溝が二条大路の路面を突き抜けて二条大路北側溝に交わることを確認するとともに、平城京の条坊の起点とも言うべき地点の座標値を知るところとなり、条坊制解明の有力な資料を得た。

III 大極殿後殿の調査（132次）

第132次の調査は平城宮の大極殿後殿とそれによりつく回廊の発掘調査で、発掘面積は2,550m²、調査期間は昭和56年6月22日から9月29日までである。

調査地は推定第2次大極殿地域の北部にあたり、東西約15m、西北約8m、高さ約1mの小土壇が残り、後殿基壇の一部と考えられていた。大正13年、内裏・大極殿一帯の保存工事に際し、東回廊の雨落溝が検出され、また、当研究所が昭和30年に行なった第1次の発掘調査で、回廊東南隅の規模・構造が明らかになった。さらに、昭和53年の第113次調査で大極殿の規模や下層遺構の存在が確認され、調査地北側及び東側の内裏地区も昭和29年以来数次にわたる調査でほぼその概要が判明している。

今回の調査では、大極殿後殿と回廊の規模・構造が明らかになるとともに、大極殿下層の掘立柱建物と同時期の掘立柱建物及び塀を検出し、大極殿地区の歴史的変遷を考察する上で重要な知見を得ることができた。

遺構

調査地の土層は、整備事業による盛土が最大50cm程あり、その下に旧耕土・床土が20~40cmある。床土の下で奈良時代の遺構を検出した。調査地の地山は黄褐色粘質土（部分的に小礫を含む）で、この地山の上を小礫混りの黄褐色ないし灰褐色の土で整地している。なお、神明野古墳周濠部では赤褐色粘土で濠を埋め立てて、上記の整地を行なっている。整地下面で下層遺構、整地上面で上層遺構を検出した。

検出した主な遺構には、奈良時代以前の遺構として前方後円墳SX0249（神明野古墳）、奈良時代の下層遺構として掘立柱建物SB10050、その東西にとりつく掘立柱塀SA10048・10049・10051、掘立柱建物SB10034、奈良時代の上層遺構として基壇建物SB10000（大極殿後殿）、その東西にとりつく回廊SC0102・10010・10090・10100、大極殿SB9150とSB10000をつなぐ軒廊SC9144、奈良時代以降の遺構として掘立柱建物SB10030・10009等がある。

1. 奈良時代以前の遺構

神明野古墳 SX 0249 神明野古墳 SX 0249 については、すでに第3・6・12・73・113の5次にわたる調査で概形が明かになっている。今回の調査では、前方部及び西側周濠を検出した。調査区中央北の断ち割り部分では墳丘端部は地山を斜めに削り出し、その上に硬くつき固めた厚さ約40cmの小礫混り赤褐色粘質土をおき、さらに黄灰色粘土を葺石の裏込めとしている。葺石は裾の部分のみが残っており、基礎に人頭大の石を一列に並べ、その上に拳大の石を並べている。

周濠は最も深いところで葺石裾から約70cmをはかるが、やや起伏があり、断面は一様なU字形ではない。

発掘区東半は墳丘部にあたるが、奈良時代に地山面まで削平されている。発掘区西半は周濠部にあたる。周濠の埋め立てに際しては、墳丘の土を利用したらしく、大極殿後殿 SB 10000 中央部の断ち割りでは、葺石が斜めに落ち込んだ状況が検出された。

第73次調査で、墳丘東側のくびれ部に造り出しのあることが判明している。今回の調査でその規模を確認するために東へ長くトレンチを拡張したが、大正の保存工事の溝によって破壊されて確認できなかった。一方、墳丘西側には造り出しおないことが判明した。

2. 奈良時代の下層遺構

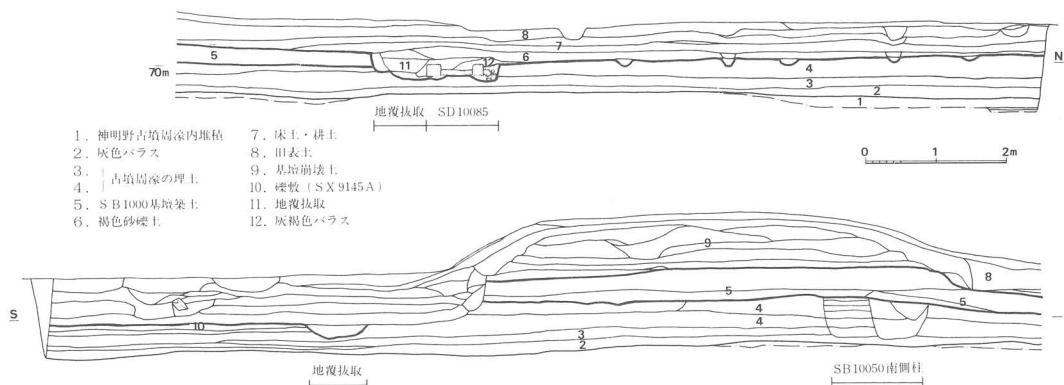
掘立柱建物 SB 10050 柱行10間、梁間2間、切妻造の東西棟掘立柱建物である。柱行柱間10尺（ただし両端間のみ12尺）、梁行柱間10尺である。SB 10050 検出面の上面には厚さ5cm程の瓦片を含む層があり、その上に大極殿後殿 SB 10000 の基壇を築成している。SB 10050 の北側柱列はSB 10000 の北雨落溝 SD 10085と重複している。つまり、SB 10050 の南北中軸線はSB 10000 と一致するが、東西中軸線は若干北へずれている。

第113次調査で検出した大極殿下層の掘立柱建物 SB 9410 と SB 10050 とは、11.8m（40尺）を隔て、SB 9140の東・西側柱列はそれぞれSB 10050の東・西妻柱列と柱筋がそろっている。

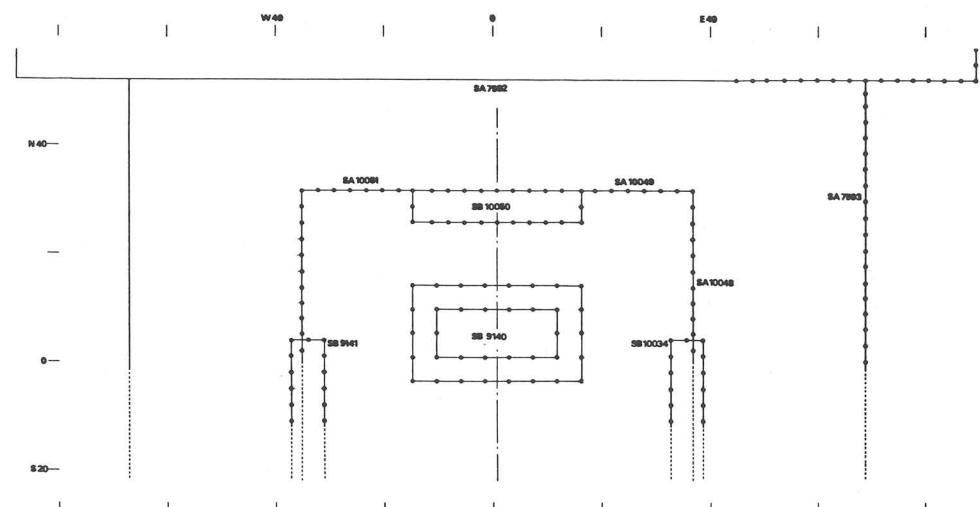
掘立柱塙 SA 10048・10049・10051 SB 10050 東側では、SB 10050 の北側柱列にとりつく掘立柱塙 SA 10049 がある。柱間10尺（SB 10050 とりつき部分のみ8尺）、東へ7間で南へ折れてSA 10048となる。SA 10048も柱間10尺で、10間分検出したが発掘区の南へさらに続いている。SB 10050の西側では、西へ続掘立柱塙 SA 10051を2間分検出した。おそらく東側と対称に鉤の手に折れる塙となるのであろう。

掘立柱建物 SB 10034 SB 10048 南端で検出した2間分の掘立柱列である。柱間は3mで、南北棟の北妻と考えられる。この西端の柱位置と第113次で検出した掘立柱建物 SB 9141 の北端の柱位置とは、SB 9140 の南北中軸線を軸として対称の位置にある。したがって、SB 10034・9141は桁行5間以上梁間2間の南北棟建物となる。SB 10034の棟通はSA 10048より1m西へ寄っており、埋土の状況からSB 10034の方が新しい。東端の柱抜取り穴から平城宮土器Ⅲの土師器杯が出土し、妻柱抜取り穴には凝灰岩片が混入している。

南北溝 SD 10040 大極殿後殿 SB 10000 の北雨落溝 SD 10085の東端から北へのびる溝である。幅50cm・深さ20cm、断面半円形でSB 10000北側の整地土(黄褐色粘質土)下面において検出した。SC 10010基壇内でこれに続く溝はなく東から西へ折れ曲っていたと考えられる。SD 10016またはSD 10085がその溝を踏襲したのであろう。内裏地区ではSD 10040延長上に溝はなく、SA 10049との前後関係も不明である。

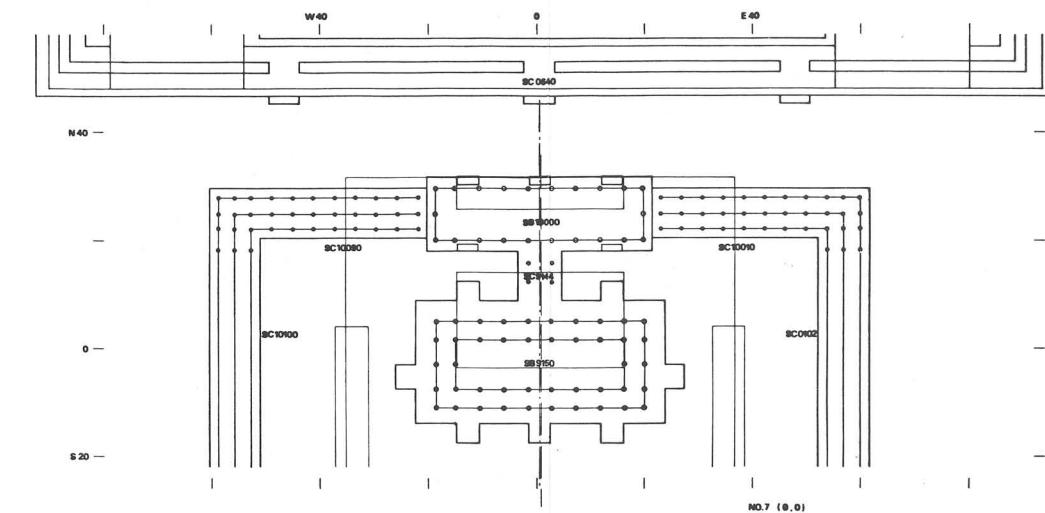


第5図 大極殿後殿断面図

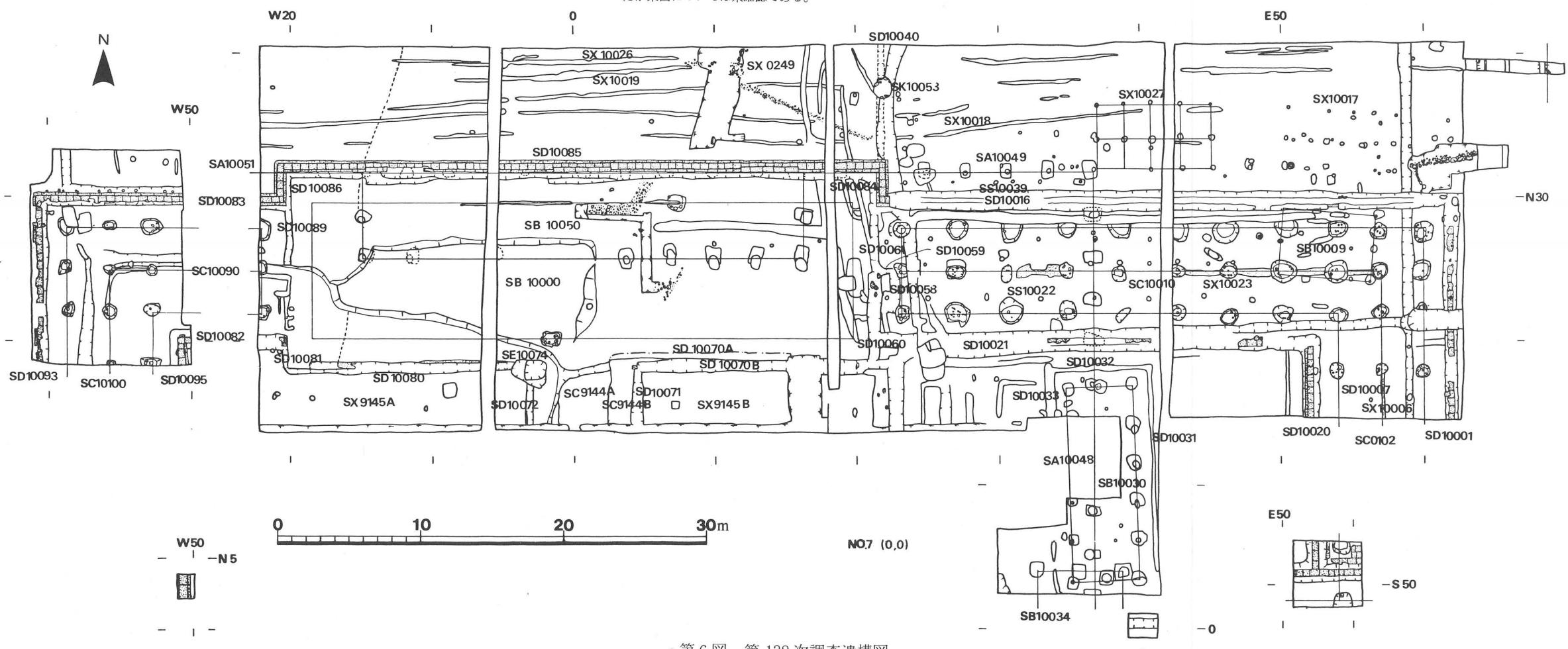


第7図 大極殿院下層建物配置図

SB 9140の廂は南北二面については確認したが東西については未確認である。



第8図 大極殿院建物配置図



第6図 第132次調査遺構図

3. 奈良時代の上層遺構

大極殿後殿 SB 10000 基壇上部は削平が著しく、土壇として残っていた部分も上半部は近世の盛土であった。しかし、基壇北側の雨落溝 SD 10084・10085・10086 がほぼ完全に残っていること、基壇南・東・西側に基壇外装の地覆石抜取痕跡 SD 10060・10061・10070B・10080・10081・10089 があることから、基壇規模は東西 41.75 m (140 尺)、南北 13.7 m (46 尺) と判明した。基壇の築成は、整地土の上に直接基壇土を積み、掘込地業を行なっていない。基壇土は褐色粘質土と礫を含む砂質土との互層で、版築状を呈するが比較的粗い仕事である。基壇の外装は、地覆石抜取り痕跡に凝灰岩製束石・羽目石等の破片があったことから壇正積基壇と推定される。基壇南側の地覆石抜取り痕跡 SD 10080・10070B は、軒廊 SC 9144B (拡幅後) の地覆石抜取り痕跡 SD 10072・10071 と一連なので、軒廊と後殿の基壇外装は一体と考えられる。また、基壇南の東半部では、SD 10070B の北に 40~50 cm の幅で地覆石抜取り痕跡 SD 10070A が残り、これが当初の軒廊 SC 9144A に連なっていることから、軒廊の改修に際し、SB 10000 の南側の基壇外装も改修したと考えられる。

基壇中央部の南北二ヶ所に礎石の根石が残る。この間隔は東西 9 m、南北 9.5 m である。したがって、SB 10000 は桁行 9 間、梁間 2 間、桁行柱間 15 尺 (ただし両端間のみ 12 尺)、梁行柱間 16 尺の切妻造の建物に復原できる。梁行方向の柱筋は大極殿 SB 9150 と一致する。基壇の出は正・背面が 2 m (7 尺)、側面が 1.6 m (5 尺 5 寸) となる。

雨落溝 (SD 10084・10085・10086) は基壇の北側のみにある。底石と両側石とからなる凝灰岩切石で作られている。整地土を削り込んで幅約 1.2 m、断面 W 字形の溝を掘り、中央の浅い部分に底石をおき、両側の深い部分に側石をおき、凝灰石小片を裏込めとして側石を固定している。底石は幅 45 cm、長さ 60 cm、厚さ 9 cm。側石はあまり一定しないが、長さ 80 cm 前後、幅は外側石 16 cm、内側石 20 cm、厚さは 25 cm 前後である。側石の上面は溝に向って斜めに削れており、とくに内側石で顕著である。溝の埋土は二層にわかれる。下層は SB 10000 が存続中にその

北側を整地した時に落ち込んだ土（灰褐色バラス）で、上層は SB 10000 廃絶後の基壇崩壊土で瓦片を多数含む。なお、SD 10086 と SD 10085 西端の底石には径 6 cm の盃状穴が数個づつある。

SB 10000 の北側には中央と東・西の 3ヶ所に石階が設置されている。石階位置では、長さ 4 m にわたって SD 10085 の内側石の幅が 35 cm に拡大し、溝幅が狭くなる。この 3ヶ所の石階位置は、軒廊 SC 9144 A および大極殿 SB 9150 の東西両石階の位置に一致する。中央石階附近から、石階に用いた三角形の凝灰岩製羽目石が出土した。これを参考にすると、基壇高 4 尺として石階は 3 級となり、基壇に約 4 尺入り込む。また、石階部分の外側石の外側に、凝灰岩の粉が幅 10 cm にわたって残る。内側石の張り出し部分に凝灰岩板石をのせ、橋としたのかもしれない。なお、基壇南側に石階の痕跡はない。

SB 10000 南側には礫敷が敷設されている。礫敷は上・下 2 層ある。上層の礫敷 (SX 9145 B) の礫は径 5 ~ 15 cm、下層 (SX 9145 A) のは径 1 cm 前後と小さい。軒廊 SC 9144 の西側では SX 9145 B は削平されていた。SX 9145 B 上面には一面に瓦片が散乱している。一方、SB 10000 北側には SX 9145 A・B に対応する礫敷はない。

軒廊 SC 9144 大極殿 SB 9140 と SB 10000 とをつなぐ軒廊には 2 時期ある。当初の SC 9144 A は東西幅 3.8 m、南北長 9.6 m、やや粗雑な版築で築成する。SC 9144 B は、これを拡幅し、幅 8.2 m となる。凝灰岩混りの褐色粘質土で築成するが、版築は行なわない。第 113 次調査では、SC 9144 基壇上に一対の礎石抜取り痕跡を検出しているが、今回の調査区内では検出できなかった。

大極殿院回廊 SC 0102・10010・10090・10100 SC 0102 は第 1 次調査および本調査で検出した東回廊、SC 10010 は SB 10000 の東側の北回廊、SC 10090 は西側の北回廊、SC 10100 は西回廊である。回廊基壇両側の雨落溝によって、基壇規模は幅 9.4 m (31 尺)、長さは、SC 10010・10090 が 40.2 m (135 尺)、SC 0102 が 78.6 m (264 尺) をはかる。基壇は整地土と地山とを削り出し、その上に盛土をほどこす。版築は行わない。基壇外装は雨落溝内側石を羽目石とし、上に

葛石をのせたと思われる。基壇上には礎石抜取り穴が三列に並ぶ。抜取り穴径は1～2mで根石を残すものが多い。抜き取った後、凝灰岩を混えた土で埋めている。SC0102の発掘区東南隅の礎石抜取り穴から平城宮土器IV～Vの土師器皿が出土し、廃絶時期を示唆する。抜取り穴の間隔によって、桁行の柱間が3.9m(13尺)、梁行の柱間が3m(10尺)に復原できる。したがって、基壇の出は5尺5寸となる。中央柱列の抜取り穴をつないで幅50cm前後の溝(SX 10007・10023・10059)内に凝灰岩粉末が残る。これを棟通り柱列の地覆石抜取り痕跡とすると、回廊は棟通りを壁または連子窓とする複廊と考えられる。SC 10010上の西から4間目には幅1mの地覆石痕跡があり、扉口が設けられていたと考えられる。SC 10010がSB 10000にとりつく部分の南側2個の礎石抜取り穴にそって、コの字形の地覆石抜取り痕跡SD 10058がある。回廊の内側に階段があり、回廊から直接大極殿後殿に昇ることができたらしい。

回廊の雨落溝SD 10001・10016・10020・10021・10082・10083・10093・10095も凝灰岩切石製で、造り・寸法はSB 10000の雨落溝と同じである。ただし、内側石はやや幅・厚さが大きく、幅は25cm、厚さは35cmで、回廊の羽目石を兼ねる。また、SD 10083北側では、側石裏込めに径20～30cmの石をほぼ1m間隔に置いている。凝灰岩はSD 10016・10021では大半が抜取られている。抜取りは旧耕土下面から切り込んでおり、比較的最近抜取ったのであろう。

SC 0102・10010の基壇内外には足場穴SS 10006・10022・10039がある。SS 10022はSC 10010の棟柱のやや北寄りと、南北両側柱の内寄りの三列に並ぶ。桁行柱間は4m前後だが、後殿きわでは3mとなる。梁行柱間は北側では1.8m、南側では2.4mで、桁行・梁間とも柱間寸法にばらつきがある。SS 10039はSC 10010基壇から北1.5mに4間分が残り、柱間は約3mである。

東西溝SX 10018・10019・10026 SB 10000および北回廊SC 10010の北側には、幅20cm、深さ10cmの5条の東西溝が部分的に途切れながら蛇行している。このうち南の4本は、2本づつ平行して蛇行し、その間隔は1.5mである。

4. 奈良時代以降の遺構

掘立柱建物 SB 10030 発掘区南端、SA 10048とかさなる位置で検出した。

SB 10030 は桁行 5 間、梁間 2 間、切妻造、南北棟の掘立柱建物である。柱間寸法は桁行が 9 尺、梁間 8 尺。北で約 2 度西へ振れている。柱抜取り穴から凝灰岩製基壇外装材および SB 9150・SB 10000 所用と同形式の瓦が出土した。SD10031・10032・10033 は SB 10030 の東・北・西をめぐる雨落溝で、埋土に多数の瓦片を含む。

掘立柱建物 SB 10009 SC 10010 東端基壇上にある東西棟の掘立柱建物である。桁行 3 間、梁間 2 間、柱間寸法は桁行 7 尺、梁行 7.5 尺。北で約 5 度東へ振れている。柱掘形は一辺約 60cm と小さい。

掘立柱建物 SX 10017・10027 いずれも仮設的な掘立柱建物と考えられる。SX 10027 は桁行 4 間、梁間 2 間、総柱の東西棟である。柱間寸法は 7 尺前後であるが一定しない。出土遺物がなく時期不明であるが、方位は振れておらず SC 10010 と併存した可能性もある。SX 10017 は梁間 2 間、柱間寸法 7 尺の東西棟であるが、桁行は不明である。北で約 4 度東へ振れている。柱掘形はない。中央部の柱穴から 9 世紀の黒色土器が出土した。

土壙 SK 10053 SB 10000 東端北側にある。凝灰岩切石・瓦を側石に転用した径 120 cm、深さ 50 cm の円形の土壙である。大極殿後殿・回廊の廃絶後につくられた水溜であろう。

井戸 SE 10074 SB 10000 と SC 9144 のとりつき部分の西にある。一辺 1.5 m、深さ 4.6 m の井戸状土壙である。近世の井戸と考えられる。

遺 物

遺物には瓦・土器・埴輪・凝灰岩切石片がある。

瓦 出土した軒瓦の内訳は別表のとおりである。6225 型式の軒丸瓦が 62%、6663 型式の軒平瓦が 65% を占め、この両者が組み合って大極殿後殿と回廊の軒瓦の主体となっていたことがわかる。これは大極殿所用瓦とも一致する。そのほか、6225-L 型式軒丸瓦 2 点、鬼瓦 2 点、隅木蓋瓦 1 点、面戸瓦 6 点が出土し

ている。

土器 大極殿院の性格を反映して土器の出土はきわめて少ない。SB 10000 北側の整地土、SX 10017・10027 の柱穴、南側の地覆石抜取り、礫敷 SX 9145 B 上面等から出土している。土師器は30点、須恵器は35点ある。時期の判明するものは12点で、土師器は平城宮土器Ⅲが1点、Ⅳ～Vが2点、Ⅶが6点、須恵器はVが1点、IVが2点、この他九世紀の黒色土器1点がある。

埴輪 塩輪は神明野古墳 SX 0249 の周濠堆積および埋土中から多く出土した。26点ありすべて円筒埴輪である。

凝灰岩切石片 SB 10000 南側の地覆抜取りおよび北雨落溝附近を中心に多数出土した。

まとめ

今回の調査の結果、第1次・113次の調査結果とあわせて、推定第2次大極殿院の規模・形式が明らかになるとともに、下層掘立柱建物が一院を形成することが判明した。

下層掘立柱建物 建物の配置は第7図のようになる。SB 9140 を正殿、

平城宮 瓦編年	軒丸瓦(点数)	軒平瓦(点数)
I 期	6279 A (1) 6284 C (1)	6643 A (1)
II 期	6225 (61) 6301 C (1) 6308 (3) 6311 (10) 6313 (1)	6663 (72) 6664 (13) 6681 D (1) 6685 A (1)
III 期	6133 (11) 6134 A (2) 6282 (4)	6691 A (4) 6694 A (1) 6721 (4) 6732 A (3)
IV 期		6725 C (1) 6726 E (1) 6761 A (1) 6801 A (5)
未確定	6296 (3)	6704 A (2)
計	(98)	(110)

第132次調査 出土軒瓦一覧

SB 10050 を後殿とし、SB 10050 北側柱にとりつく塀 SA 10048・10049・10051 が両建物を囲む（これを仮に大極殿院下層建物と呼ぶ）。正殿と後殿とは東西両端の柱筋をそろえる。両建物の棟通りの間隔は80尺、塀の東西長は240尺である。SB 9141・10034 は脇殿の位置にあるが、南北塀 SA 10048 より時期が降る。南北塀の一部を壊して脇殿を造ったのかかもしれない。大極殿院下層建物の外郭を画するものとして、内裏の南を画する塀 SA 7592 とそれにとりつく SA 7593 とがある。しかし、この柱筋は大極殿院下層建物の柱筋とは一致し

ない。大極殿院下層建物の造営尺は 1 尺 = 29.5 ~ 6 cm であるが、脇殿はほぼ 1 尺 = 30 cm である。

上層基壇建物 建物の配置は第 8 図のようになる。下層建物よりやや南にずれて大極殿 SB 9150、大極殿後殿 SB 10000 があり、後殿にとりつく複廊 SC 10010 • 10090 • 10100 • 0102 がめぐる。複廊の東西長は 410 尺、南北長は 296 尺である。SB 9150 と SB 10000 とは下層建物同様、東西両端の柱筋を等しくする。SB 9150 の軸線は、東西軸はほぼ平城方位に一致するが、南北軸は SD 10020 で測ると 12 分ほど北へ振れる。造営尺は 1 尺 = 29.7 ~ 8 cm である。

造営時期 SB 10034 の柱板取り穴から平城宮土器Ⅲの土器と凝灰岩片とが出土した。SB 10034 の廃絶が天平末年から天平勝宝以降であり、それが凝灰岩を用いた建物の造営または廃絶に併行することを示す。SB 10034 は大極殿院下層建物より造営が遅れる。SB 10034 と大極殿院とは、SB 10034 と SB 9145 との距離がやや近いという難点があるが、併存の可能性がないわけではない。また、大極殿院のうち SB 9150 は基壇拡張の可能性がある。SB 10000 についても SC 9144 の拡張とともに基壇外装を改作している可能性が大きい。以上から次のように時代区分できる。

A₁期 大極殿院下層建物の時期。その造営期は内裏南限の掘立柱塀 SA 7592、それにとりつく南北塀 SA 7593 の造営に併行し、和銅から養老年間にあたる。

A₂期 脇殿 SB 9141 • 10034 が造られた時期。A₁以降で天平年間までの間。

B期 大極殿院の時期。平城宮瓦編年第Ⅱ期以降に造営され、奈良時代後期から末期まで存続する。造営の時期は SB 10034 廃絶後とすれば天平勝宝年間以降、併存するならばそれ以前となる。SB 10034 は大極殿院造営工事の末期、または改作の頃に廃絶することになる。

C期 大極殿院廃絶後で、SB 9152 • 10009 が造られた時期。SB 10030 は B 期後半から C 期にかけて存在する。

今回の調査によって、以上のような大極殿院下層建物と大極殿院との構成・規模・変遷などが明らかになった。しかし、その造営の絶対年代の確定、大極殿院南側の様相の究明など、今後に残された課題も少なくない。

IV 南面西門（若犬養門）の調査（第133次）

南面西門の調査は昭和56年10月1日から開始し、門・南面大垣・二条大路・池状遺構・南北溝などを明らかにして昭和57年2月9日に終了した。発掘総面積は約2,700 m²である。

調査地の中央には、東西方向の道路と東西および南北方向の用水路とがあり、用水路の交点付近が南面西門跡と推定され、東西方向の用水路を境にして南は北より一段低くなっている。このため調査地区は4区にわかれた。

遺構

調査地周辺の平城宮造営前の地形は、東から西へ向って緩やかに下降する低地で、造営に際して大規模な整地を行なっており、調査区西半部ではとくに厚い盛土がある。検出した主な遺構には、南面西門基壇・南面大垣・宮内の池状遺構・二条大路・同北側溝・池状遺構から大路北側溝に流れ込む南北溝・宮内の東西溝・掘立柱建物などがある。

南面西門 SB 10200 基壇は著しく削平されており、礎石はもちろん根石も残っていなかった。門全体は整地土の上に築かれており、基壇外装の痕跡もなく、直接に基壇規模を示す資料は得られなかった。しかし、基壇底部の推定柱位置に平面円形の基礎地業が検出でき、門の平面規模は桁行5間、梁行2間、各17尺（約5.1 m）等間であることが判明した。円形基礎地業は北側柱通りでは東の4ヶ所、棟通りでは東から4・5番目の柱位置、南側柱通りでは東から4番目の柱位置の計7ヶ所を確認した。径2.6～3.0 m、深さは最も良く残っているところで0.7 mあり、内部を版築によってつき固めたものである。この地業の底面の高さは北側柱通りと棟通りの位置ではほぼ同一であるが、南側柱通りではそれより0.4 m低い。なお、この円形基礎地業は柱位置すべてに行なったものではない。そのような施工法の違いは、門・大垣およびその周辺の整地の状況とも関連するらしい。すなわち、門・大垣およびその周辺では、まず一帯を埋め立て、次に大垣・門の棟通りにあたる部分のみを版築状に整地し、第3段階でその北側と南側とを造成

するという手順を踏んでおり、掘り込み地業は行なっていない。円形基礎地業はこの整地土を掘り込んで行なっているが、円形基礎地業のない門西北部では、第3段階の整地の過程で部分的な版築がなされている。柱位置で、円形基礎地業を行わずにすませている理由の一端は、こうした前段階の整地のありかたに求められよう。なお、調査区内で南面西門に脇門が存在した痕跡は認められなかった。また、南面西門の西北部にある溝 SD 10225・10226・10228 は近世以後の溝。

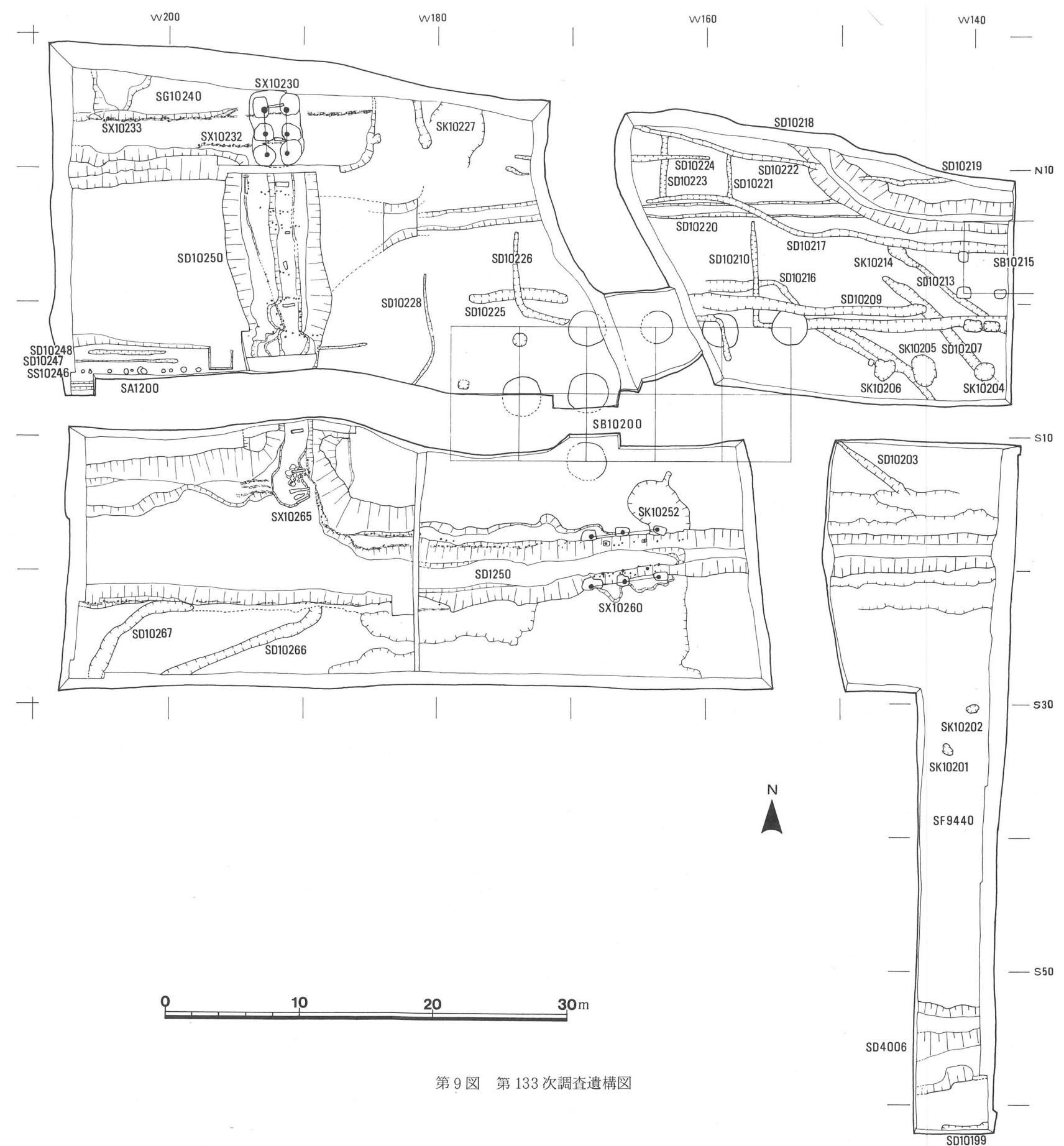
土壌 SK 10227 発掘区の北端にかかる土壌状のもので、溝の可能性もある。帶金具が出土している。

南面大垣 SA 1200 南面西門にとりつく大垣は、門の東側では削平のために残っていなかったが、門の西側で約 10 m 分を検出できた。ただし、現用水路のため、検出したのは大垣の北半分に限られた。したがって、今回の調査区内では大垣の全幅は明らかにできなかった。大垣本体の築土はわずかに 0.15 m 残るのみであったが、北側犬走りは幅約 2.0 m あり、比較的良く残っていた。犬走り上面には版築の際に堰板を支える添柱穴とみられる掘立穴が点々とある (SS 10246)。穴の間隔は 0.4 ~ 1.3 m と一定せず、一部には重複も見られ、大垣の修築が考えられる。このほか犬走りには、東西方向の細溝が 2 条通っている (SD 10247・SD 10248)。なお寄柱の痕跡は検出されなかった。

L字形溝 SD 10210 門の東北隅柱位置の円形基礎地業に重複し、それに先行する溝である。遺物はほとんどなく、短期間で埋められたものと考えられる。

東西溝 SD 10220 SB 10200 の背後を走る溝である。幅 1.2 m、深さ 0.4 m で、西で南にゆるくカーブし、幅が広くなり、南北溝 SD 10250 に達している。東端は斜行溝 SD 10218 によって破壊されている。このほか SD 10221・10222・10223・10224 などの細溝があるが、出土遺物はなく、宮廐絶後のものと考える。

掘立柱建物 SB 10215 門 SB 10200 の東北にある掘立柱建物で、梁間 2 間の東西棟と推定される。柱間は各 9 尺 (約 2.7 m) である。建物の西北部が溝 SD 10217・SD 10218 によって破壊されており、東は発掘区外になるため全体規模は不明である。この建物の西側には炭化物の充満した浅い土壌 SK 10214 があり、



第9図 第133次調査遺構図

平城宮土器Ⅲの土器をともなっていた。斜行溝 SD 10207・SD 10213・SD 10216 は SB 10215・SK 10214 に先行し、SK 10204・SK 10205・SK 10206 は近世以降の陶磁器を含む新しい時期の土壙である。

池状遺構 SG 10240 門 SB 10200 の西北で、東西約22m、南北6～10m、深さ1.5mの池状遺構の東南部分を検出した。周辺に残る畦畔の状況から推定して、池状遺構は発掘区の西および北に広がるようであるが、全容は把握できない。池状遺構は旧秋篠川流路の窪地を利用したものとみられ、その南岸に東西方向の2列の杭・シガラミ（SX 10232・SX 10233）を敷設している。池状遺構の底には何カ所か深い溜りがあり、土器・瓦とともに木簡、木製品が堆積していた。池状遺構の埋土の最上層には10世紀初め頃の遺物が含まれており、池状遺構が最終的に埋まった年代を示している。

南北溝 SD 10250 池状遺構 SG 10240 から南面大垣を通って二条大路北側溝 SD 1250 へ通ずる溝である。この溝は幾度かの改修によって複雑な変遷をたどっている。大垣位置での土層の堆積状況を中心にその変遷をみると大きく5期に分けられる。まず、宮造営前にこの位置にあった旧流路を改修して整え（Ⅰ期）、その後、バラス混りの黄褐色粘土で埋めたて第1次の暗渠としている（Ⅱ期）。ついで第1次の暗渠をとりはらって、高い位置に第2次の暗渠に付け換えており（IV期）、その間に開渠となっていた時期がある（Ⅲ期）。溝底中央のところどころに残る長さ約1m、幅約20cmの板はIV期の暗渠の台板とおもわれる。これらの板のうち、旧位置を保っているもののレベルを測定するとほぼ水平である。IV期の暗渠が撤廃されたあとは開渠となる（V期）。SD 10250の大垣の以北には溝と直交する東西方向の杭・シガラミ列が6条あるが、これらはV期の溝にともなうと考えられる。

SD 10250 の北端、池状遺構 SG 10240 の東端近くには6本の掘立柱からなる SX 10230 がある。掘形はまず大きく橿円形に掘り下げ、そのうちに柱1本毎の掘形を掘っている。柱根は南北方向にそれぞれ筋を通してはいるが、完全に平行ではない。各柱の間隔は東西方向が北端で1.6m、南端で1.5m、南北方向は東・

西とも北から 1.8 m・1.5 m である。柱根の太さは 0.36～0.50 m とマチマチであり、北端の 2 本は特に太い。すべて転用材である。池状遺構の水の流れを開閉する樋の施設で、IV 期のものと思われるが、その構造の詳細を復原する資料は乏しい。強いて類例をあげれば第 16 次調査で検出した SX 1830 ぐらいであろう。

SD 10250 の南端、二条大路北側との合流部では、はじめ河原石の石組を設け水受けの施設としているが、後には埋まって浅くなっている。南北溝は南で東にやや振れる方位を示している。

二条大路 SF 9440 SB 10200 の棟通りから南 12 m で北側溝 SD 1250 を、南 48.8 m で南側溝 SD 4006 を検出した。北側溝 SD 1250 は発掘区の東寄りでは幅約 3.0 m、深さ約 1.2 m で、西へゆくにつれて広がり、南北溝 SD 10250 との合流部以西は幅 10 m を越え、深さも 1.5 m になる。門の前面の北側溝には、間口 2 間、奥行 1 間の橋脚 SX 10260 がある。中心を門の心と揃え、柱間寸法は正面が各 8 尺（約 2.4 m）、奥行が 12 尺（約 3.6 m）である。橋脚の内側には、小掘形内に据えた細い柱根もあり、SX 10260 とは時期を異にする橋脚の可能性もある。橋脚から西方では、両岸に杭・シガラミによる護岸を行っており、部分的には、高さ・位置を変えて 2 段になっているところもある。溝肩の位置も変遷があり、側溝が幾度かの改修をうけて、最終的に北側溝の示す方位が西で大きく南に振れる結果となっている。橋脚 SX 10260 はこの方位と同じ振れをもち、さらにその掘形が改修をうけた岸に掘りこまれていることからみて、宮造営当初にさかのぼるものではない。ただし、これに先行する橋脚の痕跡は検出していない。南側溝 SD 4006 は幅約 6.0 m、深さ 0.7 m の素掘り溝である。北側溝と南側溝との間は二条大路路面にあたり、その路面幅は 32 m であり、両側溝間の心々距離は 36.8 m である。路面は発掘区東寄りでは薄い整地層があるだけで、礫敷などの舗装はみとめられない。発掘区中央以西は厚い盛土によって二条大路自体を造成している。路面にある土壙 SK 10201・SK 10202 は弥生土器を含む小土壙である。斜行する素掘り溝 SD 10266・SD 10267 は無遺物でその年代は不明である。

遺 物

多量の土器・瓦・木製品のほか、木簡・錢貨・金属製品など多様な遺物が出土した。奈良時代の遺物が大部分を占めるが、平安時代に降る遺物もあり、その他に弥生式土器、古墳時代土器、埴輪など宮造営前に属する遺物も出土した。

木簡 計約 1,150 点出土した。大部分が二条大路北側溝 SD 1250 から出土しており、ほかに池状遺構 SG 10240、南北溝 SD 10250 からも出土している。年紀のあるものには「神亀三年」「天平八年」「天平十五年」「天平勝宝二年」（以上 SD 1250 出土）、「神亀六年」（SD 10250 出土）などがある。

次に一部の釈文をかかげる。

<二条大路北側溝 SD 1250 出土>

(表) 若犬甘門□

□

(裏) 又有四段

□

□

衛門府進和炭二斛□□□□□ 木屋坊 天平勝宝三年正月廿五日番長道守臣努多方呂

<南北溝 SD 10250 出土>

塩一古 海藻一古

(表) 内膳司牒 小子部門司 堅魚三古 息□三古

[宮進カ] [如件カ]

(裏) □□□□□

□ □

[真カ]

状故牒

正六位下行典膳雀□□□□□

瓦 大量の丸瓦・平瓦のほかに軒瓦が 472 点あり、鬼瓦、慰斗瓦、面戸瓦、刻印瓦少量がある。軒瓦のうち時期の判明するものについては別表のとおりである。出土した軒瓦の年代が、平城宮瓦編第 I 期に属するものが大多数を占め、しかも、そのうちで藤原宮式が高い比率を示す点はこれまでの宮城門・大垣地域の調査結果と

軒瓦 時期	軒丸瓦	軒平瓦	計
I 期	110 (うち藤原宮 式 64)	209 (うち藤原宮 式 186)	319
II 期	26	33	59
III 期	8	5	13

同様である。

土器 出土土器の大半は土師器・須恵器の食器類であり、これに少量の綠釉・三彩陶器がともなう。平城宮土器の III ~ V にわたるもののが

多く出土しているが、平安時代に降るものもあり、池状遺構 SG 10240 からは10世紀初めに編年される土器も出土した。これらの土器の中には「靈龜二年七月知」「厨菜」「厨」「雅樂寮」「常」「盛二」「大」と墨書きしたものが含まれている。

木製品 曲物、杓子、物差、桧扇、人形、削掛け、人面墨画（裏に「神護景雲」の墨書がある）、刀子柄、斗の雛形などの木製品が出土し、人形には鉄釘を打った例がある（SG 10240）。このほかに籠や草鞋などの編物も出土した。

金属製品 帯金具、鉄釘、挂甲小札、刀装具、刀子などがある。錢貨としては「和同開珎」「万年通宝」「神功開宝」が出土した。

まとめ

今回の調査において、南面西門（若犬養門）・大垣・池状遺構・南北溝・二条大路を一体として明らかにすると共に、平城宮の造営にあたっての造成の状況などを具体的に解明したことは大きな成果であった。以下要点をまとめる。

南面西門（若犬養門）については、第16次調査の南面中央門（朱雀門）、第122次の南面東門（壬生門）の調査とあわせて、平城宮南面の3門すべての調査がおわったことになる。これで宮城門と外周部の状況がさらに一層明らかとなった。とりわけ、円形基礎地業から復原できる南面西門の規模は5間×2間、17尺等間で、南面中央門（朱雀門）と同様であり、西面中央門（佐伯門）、西面南門（玉手門）、南面東門（壬生門）が梁間15尺2間と推定されているのとは異なることは注目される。朱雀門以外の宮城門のうち、柱の位置が判明したのは今回の南面西門がはじめてである。また、出土木簡に「若犬甘門」の記載がみられるることは、南面西門の門号を示す直接の史料として重要である。さらに、池状遺構と大路北側構とを結ぶ南北溝のように、旧地形に合せて宮内排水系路を設置している点も注目される。しかし、池状遺構が、従来、秋篠川旧流路と推定されていた現畦畔の乱れとどのように関連するのか、また、それが『続紀』に頻出する「南苑」や天平宝字6（762）年3月壬午条の「宮西南に於て新たに池亭を造る」という記事に対応するものか否かなど、今後に残された課題も少なくない。

V 推定第一次朝堂院地区東南隅の調査（第136次）

推定第1次朝堂院地区では、これまでに第27・72・75・77・97・102・111・117・119次の発掘調査を実施してきた。その結果、この地区の東半部における遺構の変遷と南門の存在が明らかになった。今回の第136次調査は、推定第1次朝堂院地区の東南隅の様相についての知見を得るために実施したものである。調査区は第111次調査地の南約240m、第119次調査区の東約80mの位置で、南北約40m、東西約70mの範囲である。なお、調査は1982年1月7日に開始し、現在最終段階に達しているが、継続中である。本稿は3月末迄に得た所見にもとづき執筆したものである。

遺構

調査区の現状は、南部に東西方向の道路が走り、その北側には側溝が設けられて、さらにその北に接して高圧電線が埋設されている。現道路は、旧農道の上に盛土を施して造成したもので、現道路下の旧道両側には水田の境界杭が東西に打たれていた。旧水田はこの農道の南側で一段低くなっている、また、土層観察用に設けた東側の畔を境にして、その東側で一段低くなっている。したがって、発掘区内では東南の一角が最も低くなっている。

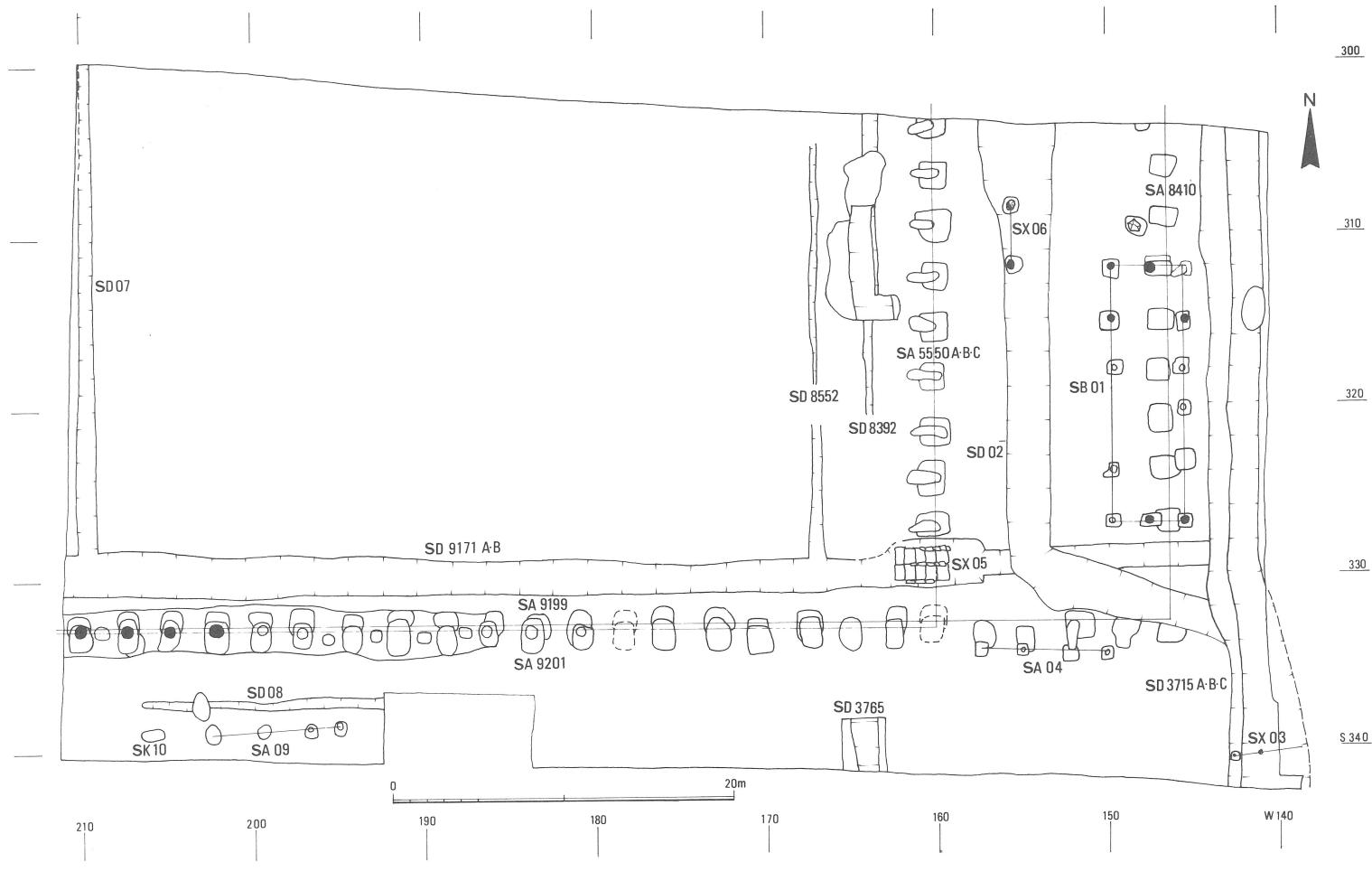
宮造営以前の旧地形は、調査区内で北から南へ向って緩やかに下降し、また東に向っても下降して、推定第2次朝堂院地区との間の谷筋へと続く。遺構は後世の削平をうけているため、整地の区別による時期区分ができず、床土下の近世陶、器片を包含するバラス層を排除したところではほぼ一様に検出した。今回検出した主な遺構は、掘立柱建物1棟・掘立柱塀5条・溝6条・石組の暗渠1条などである。これらの遺構は3時期に大別できる。

A期 この時期の遺構には、溝SD3765・塀SA8410・9199がある。SD3765は素掘りの南北溝で、幅は約4mである。発掘区の北部と南端で部分的に検出し、この地区を南北して貫流していたことがわかった。遺物の出土はみられない。SA8410は、SD3765の東約17mに位置する南北塀である。掘形のみで柱痕跡もし

くは柱抜き取り穴が認められないのは、第111次調査など今回の調査区の北で行なった調査での所見と同じである。柱掘形を掘削した後に計画変更があったのであろう。SA 9199は東西塀である。B期の東西塀SA 9201と重複しており、柱痕跡の有無については未確認である。ただし、第119次調査の成果によると、SA 8410同様、掘形を掘削したが柱を立てずに埋め戻したものらしい。SA 8410とSA 9199とは、推定第1次朝堂院の東と南とを区画するために計画したと考えられる。

B期 SD 3765が埋め立てられ、推定第1次朝堂院の東を限る掘立柱南北塀SA 5550と、南を限る掘立柱東西塀SA 9201とによって、朝堂院の区画ができる。SA 5550の東約18mには基幹排水路として、南北溝SD 3715が掘られる。SA 5550は、従来の調査によって3時期の変遷が推定されているが、今回の調査区では後世の削平により一番古い時期の掘形と柱抜取り穴を検出したのみである。柱間寸法は約3m(10尺)である。SA 9201は朝堂院の南門に取り付く東西塀である。西の4つの掘形には直径約60cmの太い柱根が残っている。東にいくに従って後世の土壌によって搅乱されている。SA 5550はSA 9201より南には延びないので、第1次朝堂院の東南隅はこの2つの塀によって閉じられていたことが判明した。SD 3715は発掘区東端で検出した。発掘区南端から約12mで溝の幅が急に広がっているので東肩は発掘区外になる。溝は新旧二時期あり、旧溝SD 3715 A・Bはさらに二層の堆積層にわかれる。旧溝の一部には杭と板を用いて簡単な護岸を施していた。新溝SD 3715 Cは、旧溝を埋め立てた後、旧溝の西肩に接して掘られたごく浅い幅1m前後の溝である。SX 03はSD 3715に架けられた橋である。橋脚2本分を検出したが、流れの中程に立っている東の橋脚の周囲には細い杭が打ってあり、木質の遺物が堆積していた。

C期 第1次朝堂院の東限が築地塀に改作された時期である。SD 3715はこの時期にも存続する。東西溝SD 9171は南門の脇から東へ流れ、SD 3715に流れ込む。その際に、朝堂院の東根を凝灰岩の石組暗渠SX 05によって通り抜けるので、SA 5550はこの時期には築地塀に作り替えられているが、築地塀の痕跡は確認で



第10図 第136次調査遺構図

きなかった。おそらく後世の削平によって消失したのであろう。SD 02 は SA 5550 の東方約 6 m のところを南流して東へ斜行する幅 3 ~ 4 m² の素掘りの溝である。SD 9171 と SD 3715 とを切っているので、C 期の終り頃に掘られたものであろう。この溝から出土した土器は、平城宮土器編年 IV 期のものが多く、第 V 期も少し含まれている。これ以前の調査では SD 02 は検出されていないので、発掘区の北方でどのように流れていたのかは不明であるが、奈良時代末のこの地区の様相を考える上で興味がもたれる。

以上に述べた遺構の他に、時期区分未定の南北棟掘立柱建物 SB 01 と南北溝 SD 07 とがある。SB 01 は桁行 5 間（10 尺等間）、梁間 2 間（7 尺等間）で、妻柱が SA 8410 を切っており、その位置が SD 3715 と SD 02 とに規制されているようなので、B 期または C 期に属すると思われるが、建物の性格は不明である。SD 07 も今回の調査ではじめて検出した溝である。第 1 次大極殿院の SB 7802 の東妻と位置がほぼ一致するが遺物も少なく年代や性格は不明である。

遺 物

量的には瓦が圧倒的に多く、軒瓦は三百点を越す。SD 9171 の上層には藤原宮式の瓦が一面に埋まっていた。その状況は第 119 次調査の場合と同じである。完形品も多く、短期間に廃棄されて埋められたようである。SD 3715、SD 02 からは平城宮瓦編年第 II ・ III 期の瓦が出土した。

土器は主として SD 02 から出土し、SD 3715 からもそれに次いで出土したが、
それ以外の出土数はきわめて少量である。SD 02 からは、「□川国」、「供養」、
「彈正」と墨書した須恵器片と「忌 八□」とヘラ書した須恵器片が出土した。
その他、完形に近い奈良時代初期に属する須恵器の甕や円面碁の破片も出土。

木器では大型のシャモジや板材が出土した。

木簡は SD 3715 から若干量出土した。現在解読中であるが、「□部大蔵／コ部須
々支万呂」と人名を 2 行書にしたものや「少疏日下部直三堅□□」、「□木屋坊
□」と記したものもある。

まとめ

今回の調査区内は後世の削平をうけていて、整地土層の違いによる遺構の時期区分は SD 3765以外はできなかった。しかし第1次朝堂院地区の東南隅が東面・南面の二つの塀によって閉じられ、東を限る塀は南に延びないことが明らかになった。また、第111次調査で検出された推定第1次朝堂院東第二堂が南へどこまで続くのかは未確認であるが、今回の調査によって、少なくとも朝堂院の南門を入ってすぐ東側の地域にはまったく建物がなく、広場のような状況であったことが明らかとなった。第16・17次調査により、平安宮朝堂院の応天門相当位置に門が存在しないことが確認されているので、第1次朝堂院地区の朝堂区南方に朝集殿があったとすると、藤原宮の朝集殿のように朝堂の一郭の外に独立して建っているのかもしれない。朝堂院の東と南とを限る2条の掘立柱塀は、その造作から廃絶状況まで著しく違っている。すなわち SA 5550 A は柱を抜き取り、SA 9201 は柱根が残存している。また、両者の柱の間隔が異なっており、さらに SA 9201 はその西半部において布掘り状の掘形をもつ。宮造営に際しての施工方法についても興味ある知見が得られたといえる。また、今回新たに検出した2条の溝についても、奈良時代末頃のこの地域の利用のし方について考える上で好資料と言え、今後の調査の成果が期待される。

次 数	調査位置と調査目的	検 出 遺 構	出 土 遺 物
第 131-1 次	宮西北部・佐紀池西	表土から約40cmで地山 近世南北溝 1・東西溝 1・小ピット 2	瓦片
10	宮西北部	表土から約90cmで地山 柱穴状の土壙 1・小ピット 4	ナシ
14	富北辺部 第129次調査区の西隣	表土から約50cmで地山 東に向って段がついて下降する	ナシ
15	宮中央北辺部	表土から約40cmで地山 近世円形土壙 1・斜行溝 1・小ピット 2	近世瓦片
20	大極殿の南（東西2ヶ所）	表土から約40cmで地山（L：68m） (東区)円形土壙 1・小ピット 6 (西区)小ピット 4	瓦片
23	東院北辺地区	表土から約35cmで地山 中世東西溝 1・近世東西大溝 1	瓦・埴・陶磁器片 土師器・須恵器片
24	北面大垣塁地部分推定地	南では表土下15cm、北では30~60cmで地山、幅 1.4 mの東西溝。南は地山削出の大垣か？	瓦片・土師器
29	宮北辺地区 市庭古墳の前方部	西では表土から 5 cm、東では30cmで地山を確 認。古墳盛土なし。	瓦片 須恵器・土師器片

本文未収録の平城宮内発掘調査地の概要

第2部 平城京の調査



次 数	調 査 地 区	面 積	調 査 期 間	備 考
※125補足	右京九条一坊十二坪	大和郡山市觀音寺町 350 m ²	81	8. 3 ~ 8.14 県道城廻り線
※ 131-2	右京一条二坊二坪	二条町 1 丁目 207	4.11 ~ 4.24	ファミリー駐車場
3	薬師寺西面大垣	西の京町 407 - 1 7.6	5. 6	中西理恵氏宅
4	左京一坊大路	柏木町 527 - 5 18	6. 9 ~ 6.11	泉谷信雄氏宅
5	宮北方 (水上池西)	佐紀東町2173 - 1 18	6.12 ~ 6.16	小山光雄氏宅

次 数	調 査 地 区	面 積	調 査 期 間	備 考
131 - 6	右京一条二坊二坪	二条町 1 - 32 - 10 8 m ²	'81 6.18 ~ 6.20	白櫨鹿雄氏宅
※ 7	右京六条三坊四坪	六条町字西波464 - 1 180	6.22 ~ 6.30	南都銀行
※ 8	左京一条三坊二坪	法華寺町1132 - 3 60	7. 1 ~ 7. 8	塚本武則氏宅
※ 9	右京六条一坊十四坪	西の京 104 - 3 100	7. 6 ~ 7.15	大西英男氏宅
11	外京五条大路に南接	南京終町出口35 - 1 7	7. 9	一栄住宅KK
12	右京五条一坊十二坪	五条町 135 - 1 30	7.27 ~ 7.29	木本昭二氏宅
※ 13	左京一条三坊十六坪	法華寺町1429 26	8. 3 ~ 8. 4	保健衛生社
※ 16	左京二条四坊九坪	法蓮町金池410 - 2 350	8.31 ~ 9.18	井田政吉氏宅
17	大乗院旧境内	片原町1096 25	9.24 ~ 9.28	県盲人福祉センター
18	右京三条二坊八坪	尼ヶ辻町甲 344 1	9.24	近鉄技研
19	東三坊大路	法蓮町 160 - 6 121	9.28 ~ 9.29	朝鮮信用組合
21	唐招提寺西方院	五条町千手ヶ丘528 22	10. 1 ~ 10. 5	西方院保存庫
22	右京七条二坊十坪 ・十五坪	西の京町 401 24	10. 1 ~ 10. 5	薬師寺八幡宮
25	左京一条二坊九坪	法華寺町988 - 30・38 30	10.13 ~ 10.15	堀口竹男氏宅
26	右京八条四坊一・二 坪境	大和郡山市九条町 448 ~ 451 72	10.19 ~ 10.20	山田政欣氏宅
27	北一条大路西一坊 大路交点	佐紀町 3537 27	10.20 ~ 10.23	西口イカ氏宅
※ 28	右京六条一坊九坪	六条町236 - 2 238 - 2 36	10.27 ~ 10.28	喜多恵二氏宅
※ 30	右京三条四坊七坪	大宮町 5 - 188 - 3 233	'82 1. 6 ~ 1.16	不動興産KK
※ 31	左京二条二坊十三坪	法華寺町250 - 1 251・252 170	2. 8 ~ 2.23	鈴木 勝氏方
32	宮北方	佐紀町 13	2.18 ~ 2.19	塚本惣一氏宅
33	左京一条三坊一・二坪	法華寺東町 10	2.22 ~ 2.23	森田太一郎 恭光氏宅
134 - 1	左京二条六坊十一坪	北魚西町 650	'81 8.27 ~ 10. 6	奈良女子大
2	左京二条七坊三坪	同上 1000	'82 1.22 ~ 5. 4	奈良女子大
※ 135	右京七条二坊十五坪	西の京 414 - 1 450	'81 10.27 ~ 11.20	薬師寺駐車場
137	右京二条二坊十六坪	西大寺南町2247 - 1 750	12. 3 ~ 12.26	明光開発
※ 138	左京三条四坊三坪	大宮町 3 - 214 680	'82 3. 1 ~ 4. 6	日興不動産KK
次数外	西市 2 次	大和郡山市九条町 1120	'81 4. 8 ~ 6.25	吉本工務店
	西市 3 次	同上 300	7.13 ~ 7.31	同
※	西大寺境内	西大寺芝町 1 - 1 - 5 15	12.15 ~ 12.19	倉庫新築
※	同	同上 26	'82 1.13 ~ 1.18	浴室
※	同	同上 7	2.24	浄化槽設置
※	西大寺東塔	同上 15	2. 8 ~ 2.15・24	基壇修築
※	薬師寺南門 他	西の京町381 - 1 他 116	1.21 ~ 2.23	門新築
	法隆寺境内	生駒郡斑鳩町岡本 '81 4.1 ~ '82 3.31		防災工事

第11図 昭和56年度 平城京内発掘調査地一覧 (※は本書に収録)

I 平城京左京の調査

1. 左京一条三坊二坪 — 木取山古墳 — の調査（第 131 — 8 次）

本調査は住宅建設にともなう事前調査である。調査地はコナベ古墳の南 140 m で、一条条間路北側溝の存在が予想された。また、調査地北の墓地の高まりを古墳の名残りとする意見があり、その確認が期待された。調査は工事申請地西端に南北トレンチを設け、周濠確認後、東端 2ヶ所のトレンチで周濠の方位を決定した。

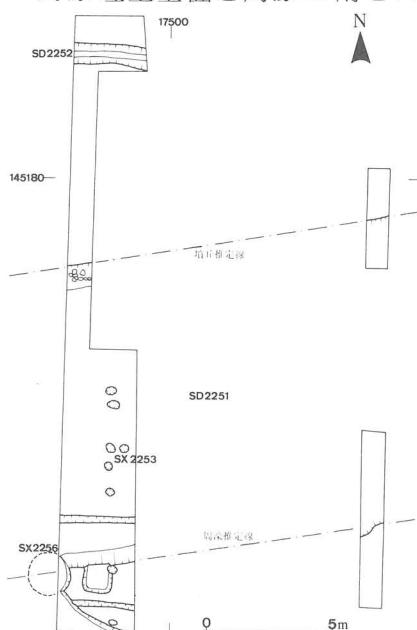
層序は、調査区北端では耕土・床土下に赤褐色粘質の地山、南端では耕土・床土下に路肩整地土があり、その下で赤褐色バラス地山を検出した。遺構には、古墳周濠、奈良時代の溝 1 条・ピット群、近世野壺 SX 2256 などがある。

古墳周濠 SD 2251 は幅 12 m、深さ 1 m で、北岸に葺石が残る。濠底に暗灰色粘質土が溜り、バラス混り赤褐色粘質土（埋土下層）・黄褐色粘質土（埋土上層）で埋め立てている。埋土下層から平城宮土器 I の土器片が出土し、平城京造営時に周濠を埋めたことがわかる。円筒・蓋形埴輪片は埋土上下層間から出土した。

周濠埋土上面と周濠の南とに、奈良時代ピット群 SX 2253 がある。ピット中から興福寺式軒瓦などが少量出土した。

一条々間路北側溝は検出されず、調査区の南にあると思われる。調査区北端で検出した東西溝 SD 2252 は、古墳削平後に掘削した幅 0.8 m、深さ 0.3 m の溝で、溝中から土師器高杯など奈良時代末期の土器が多数出土した。

周囲の地勢などから検出した古墳の全形を推定すると第 13 図のようになる。すなわち、
①調査地北の墓地の高まりは、法華寺所蔵の古図でもほぼ円形の地割を残す。これを古墳の名残りと考え、本調査成果を加味すると、主軸をほぼ南北に置く前方後円墳となる。



第12図 第 131 — 8 次調査遺構図

②本調査で検出した周濠の方位は、ウワナベ・コナベ古墳の前方部南辺の方位に近似する。

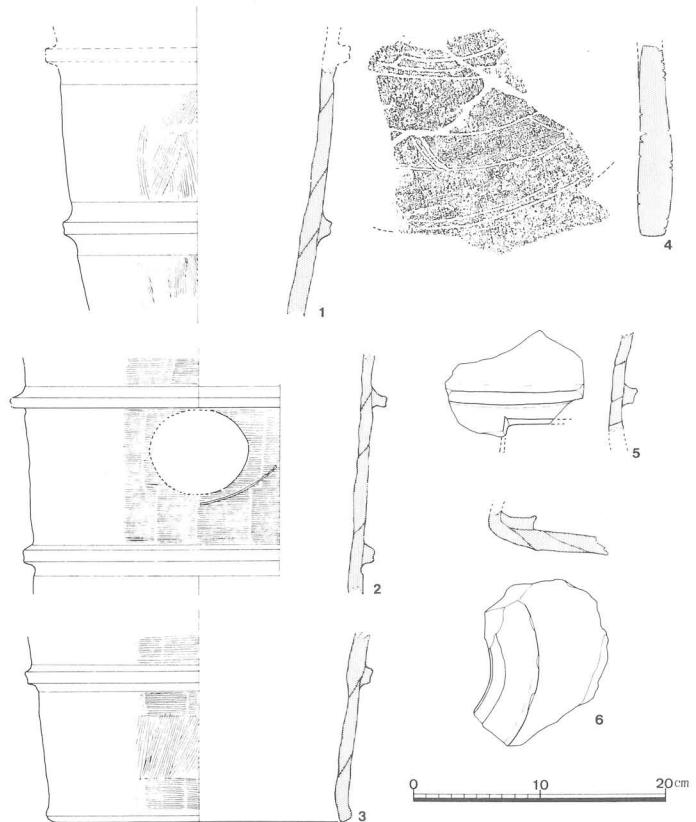
③北の高まりを後円部の名残りとすると、平城京造宮に際し、前方部は削平・整地されたが、後円部は何らかの理由で残されたことになる。とすると、法華寺所蔵の古図にも見える後円部北東の道路の彎曲や、後円部西に真北からやや西に振れた畔道は、古墳周濠の外形の名残りと考えることができる。

④以上の諸点から周濠の外形を復原すると、墳丘の形はコナベ古墳型よりもウワナベ古墳型が妥当し、全長 110 m 強の前方後円墳となる。なお、同古墳は法華寺所蔵の古図にもとづき、「木取山古墳」と命名した。

周濠出土の円筒埴輪は、有黒斑・無黒斑の両者があり、外面第2次調整は、両者ともにB種ヨコハケである。第2次調整を欠くものもあるが、5世紀初頭の所産と考えられる。



第13図 木取山古墳 墳丘復原図

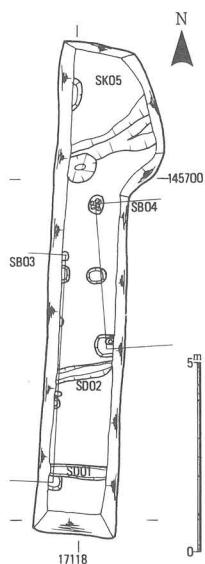


第14図 木取山古墳出土埴輪実測図

2. 左京一条三坊十六坪の調査（第 131 – 13 次）

保健衛生社の増築工事にともなう事前調査で、調査地は、左京一条三坊十六坪にあたる。調査地の層序は、客土下に旧水田の耕土・床土があり、その下位に中世の遺物を含む灰色粘質土・暗灰色砂質土・黄褐色砂質土（古墳時代の整地土）の順で黄褐色粘土（地山）にいたる。

検出遺構 検出した主な遺構は、溝 2 条、建物 2 棟、土壙 1 基である。遺構は、いずれも古墳時代の整地土（黄褐色砂質土）面で検出した。トレーナー南辺の東西溝 SD 01 は、幅 0.4 m、深さ 15 cm で、その軸線はほぼ平城京造営方位に合致し奈良時代の溝の可能性がある。SD 02 は幅 0.4 m、深さ 20 cm の東西溝で、一個体分の円筒埴輪片が出土した。埴輪円筒棺の掘形あるいは埴輪列を据えるための溝であろう。掘立柱建物 SB 03 は、南から 2 間分が 7 尺（2.1 m）等間、3 間目は 6 尺（1.8 m）である。桁間 3 間、梁間 2 間程度の小規模な南北棟建物と考えられよう。掘立柱建物 SB 04 は柱間 7 尺（2.1 m）で 2 間分を検出した。検出した柱列は梁行にあたり、東西棟建物と考えられる。SB 03 は京造営方位に対し北で東に、SB 04 は北で西に偏し、平安時代以降のものである。本調査地に北接する



第15図 第 131–13 次調査遺構図

国道 24 号線バイパス敷設にともなう調査地でも、同様な方位を持つ平安時代の小規模な建物群が検出されている。（『平城宮発掘調査報告 VI』参照）。なお、遺構図では、SB 03 は西に、SB 04 は東に建物を復原したが、それぞれ逆の方向に延びる可能性もある。SK 05 は、深さ 60 cm、上下 2 層からなり、上層の暗灰色砂質土から、巨大な割石、扁平な石とともに奈良時代初頭（平城宮土器 II）の土師器・須恵器と円筒埴輪片が、下層の暗灰粘土から 5 世紀後半の土師器の高杯・円筒埴輪片が出土した。SK 05 はウワナベ古墳の外堤から約 70 m 南にあり、また、国道 24 号線バイパス敷設にともなう調査で検出した帆立貝式の前方後円墳（平塚一号墳）とも近接しており、古墳の周濠の一部と考えられよう。小規模な調査であるため、墳形や古墳本体がどちら

にあるのかも定かでないが、埋土上層から奈良時代初頭土器が出土していることから、京造営に際して、墳丘を削平し、周濠を埋め立てたと考えられよう。

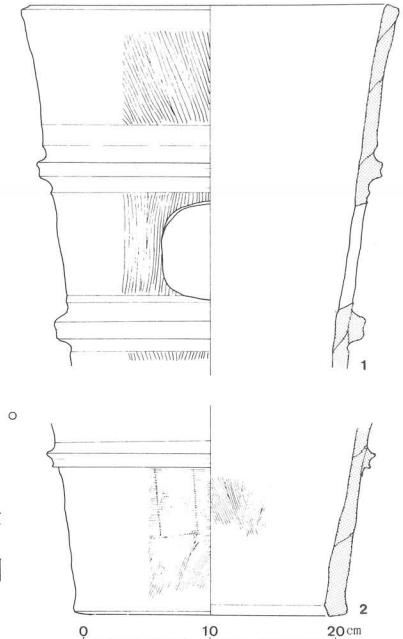
出土遺物　円筒埴輪片がSK 05・SD 02から出土した。いずれも無黒斑で、SK 05出土例は、タテハケ調整の後、断続的なヨコハケ調整を施すものが大半を占め、SD 02出土例は、タテハケ調整のみである。ウワナベ古墳の円筒埴輪に共通する特徴を持ち、5世紀中頃である。

まとめ　実体は不明確であるが、新たに京造営時に破壊された古墳の存在が明らかになった。バイパス調査で検出した古墳や先述の木取山古墳とともに、佐紀盾列古墳群の構成を知る上で貴重な資料といえよう。

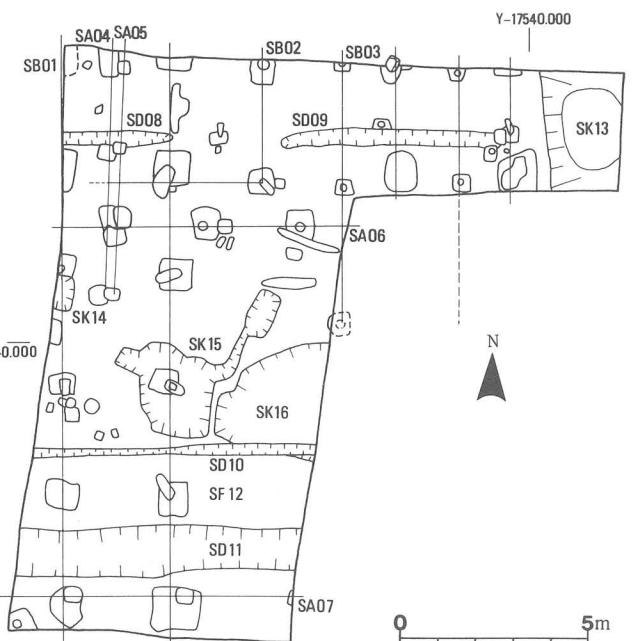
3. 左京二条二坊十三坪

の調査（第131－31次）

本調査はレストラン建設に先立つ事前調査である。調査地は、左京二条二坊十三坪の東辺部にあたり、東二坊大路西側溝および、十三坊の宅地内遺構の検出を目的とした。調査区の層位は、耕土・床土下に中世の遺物を含む砂礫層があり、その下に遺物をほとんど含まない灰色粘土が厚く堆積し、さらに奈良時代の遺物を含むバラスまじりの灰黒色粘土、地山（黄褐色粘土）と続く。厚い灰色粘土の



第16図 第131－13次出土円筒埴輪
(1.SD02出土 2.SK05出土)



第17図 第131－31次調査遺構図

堆積は、この地が奈良時代以降、中世初頭まで沼沢地であったことを示す。遺構は、一部では灰黒色粘土の上面から切り込んでいるが、大部分は地山上面で検出した。

遺構 検出した主な遺構は掘立柱建物 5 棟、掘立柱塀 4 条、素掘溝 4 条、道路状遺構 1 条、土壙 4 基である。これらは大きく 3 時期に区分できる。

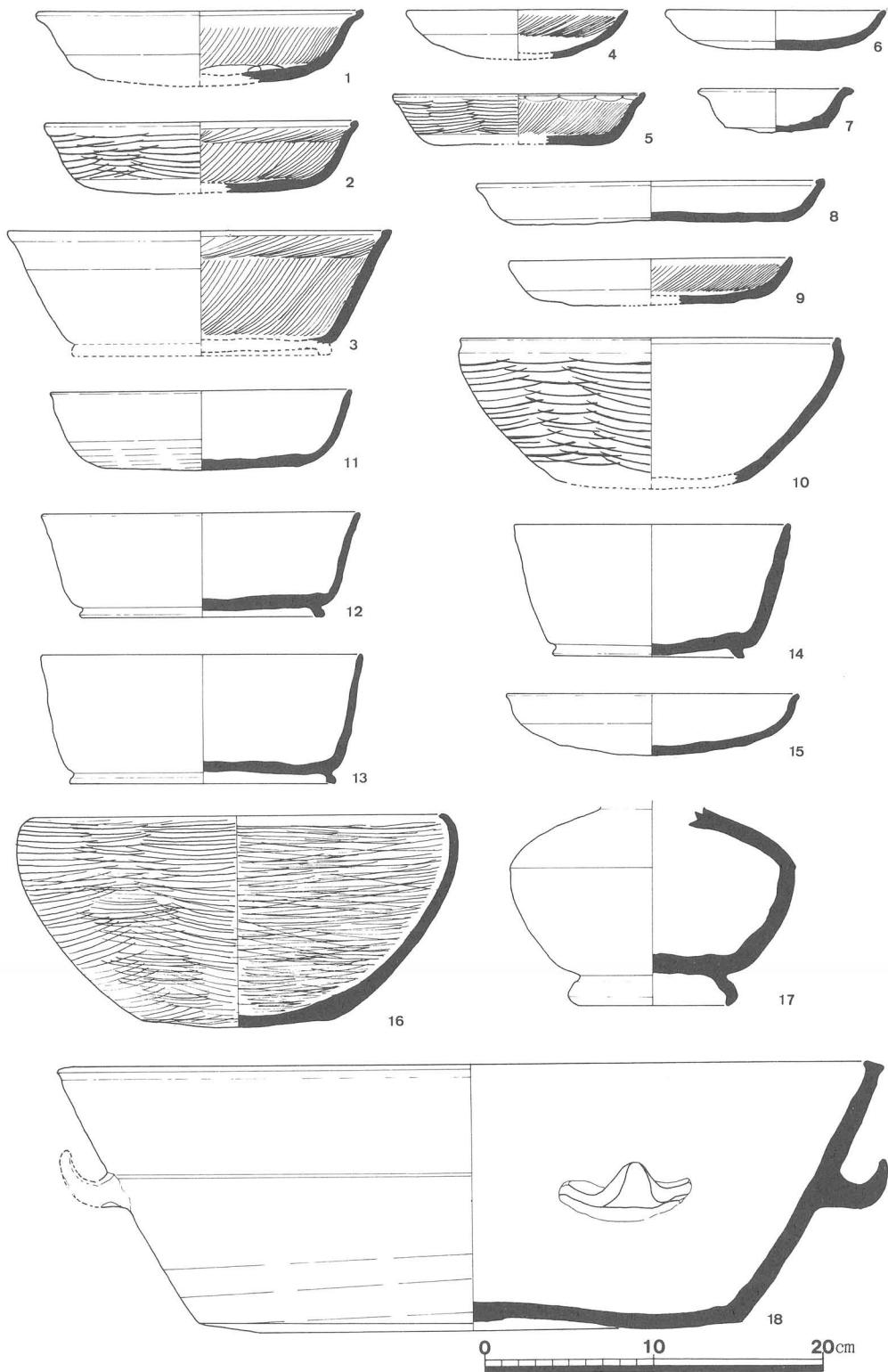
A期 東西塀 SA 06 と東西溝 SD 08・SD 09 とで南北を区画する時期である。土壙 SK 13 下層もこの時期に属する。

B期 A期の区画が廃絶し、坪内に大形の掘立柱建物が建つ。まず、掘立柱建物 SB 02 が建つが、まもなく廃絶し、東西両面庇付南北棟の SB 01 が建つ。SB 01 は桁行 5 間分を検出し、梁間 4 間、柱間 10 尺等間である。土壙 SK 13 の上層・SK 16 もこの時期に属する。

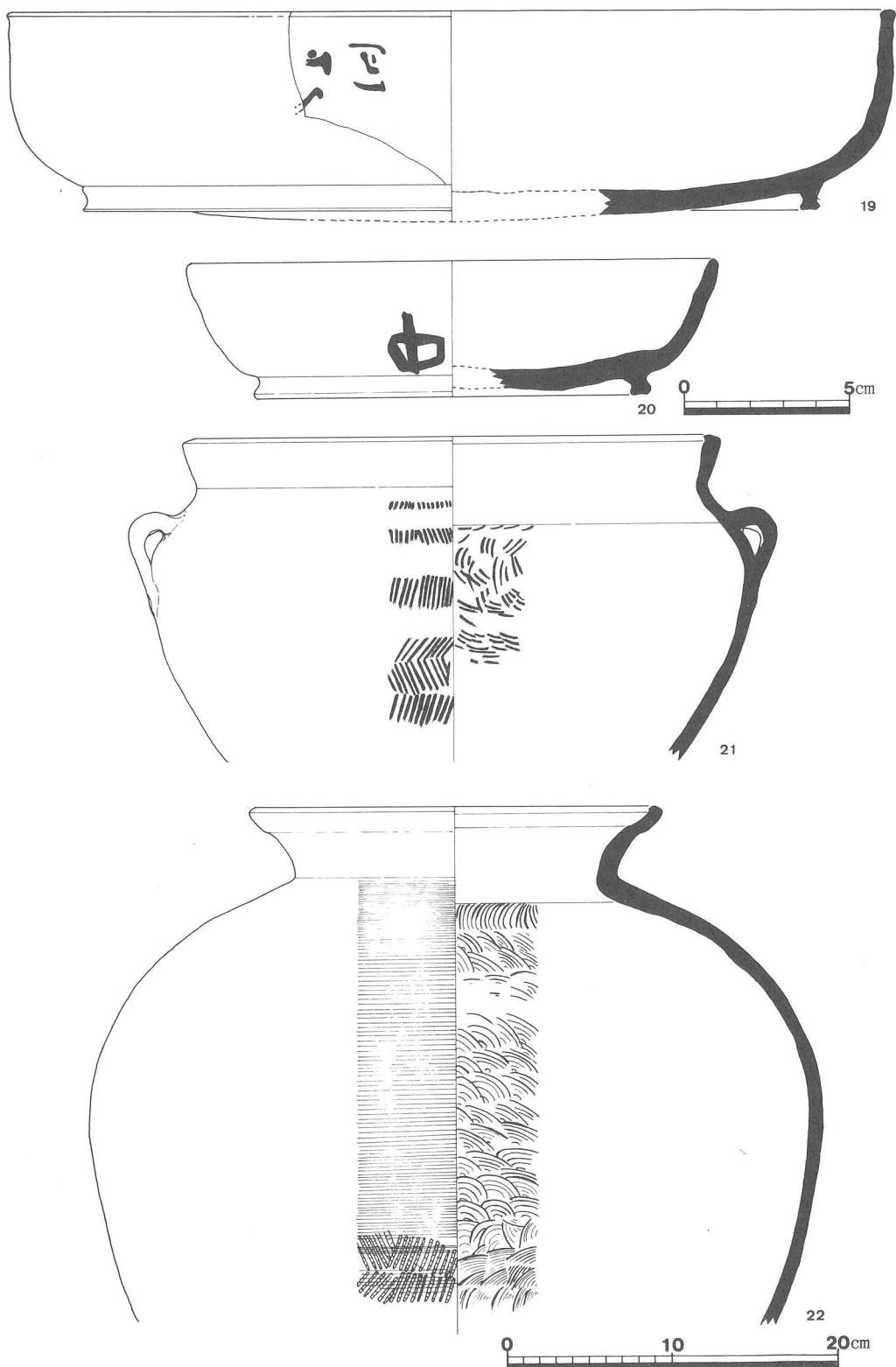
C期 東西塀 SA 07 および東西溝 SD 10・SD 11 で区画された道路状遺構 SF 12 によって、坪内を南北に大きく 2 分する時期である。この区画は、13 坪の南北 2 等分線にほぼ合致する。区画の北には、南北棟掘立柱建物 SB 03、その西に南北塀 SA 4 がある。南北塀 SA 05 は SA 04 を建て替えたものである。土壙 SK 14・SK 15 もこの時期に属する。

遺物 SK 13 下層から奈良時代初頭（平城宮土器Ⅱ）の土器が多数出土した（第18・19図）。また、SK 14・15・16 から奈良時代末期の土器が出土した。SK 13 出土品には、「中」（第19図19）と判読不能（同20）の墨書をもつもの、土師器の製作技法で作られ、須恵器に焼き上げられた皿 A（第18図15）がある。また、SK 14 から、内面に漆紙が付着した土師器碗が出土した。漆紙には墨痕がある。瓦の出土量は少ないが、SK 13 から軒丸瓦 6313 型式が 2 点、SD 11 から軒丸瓦 6308 型式が 1 点、SK 16 から緑釉平瓦の小片が出土した。

まとめ 出土遺物は大半が奈良時代のもので、A～C の各時期はすべて奈良時代に納まると思われる。東二坊大路関係の遺構は検出できなかったが、B期に十三坪内で比較的大規模な掘立柱建物が整然と配置されていることや、C期に坪が南北に 2 分されることなどが判明した。



第18図 第131-31次 SK13出土土器実測図 (1~5・8~10; 土師器、7・12~18; 須恵器)



第19図 第131-31次 SK13出土土器実測図

4. 左京二条四坊九坪の調査（第 131 - 16 次）

奈良市法蓮町金池でのマンション建設にともなう事前調査である。調査地は通称一条通りの関西線踏切りの東 150 m で、道路南側にあり、一条大路の南側溝と、左京二条四坊九坪の宅地内遺構が想定された。

調査区の層位は、耕土・床土下に灰褐色砂質土が全面に広がる。発掘区東南半では、その下の地山（黄褐色粘質土）上面で遺構を検出した。発掘区西北半では、灰褐色砂質土下に灰赤褐色砂質土があり、その下の古墳時代の旧河川 SD 32・SD 33 の上面で遺構を検出した。

遺構 検出した主な遺構は、掘立柱建物 10 棟・掘立柱塀 7 条・井戸 1 基・溝 2 条・土壙 8 基などである。重複関係から 4 時期以上の変遷が考えられる。

A期 素掘りの東西溝 SD 05 とこれに付属する 2 条の東西塀 SA 04・SA 06 の時期である。SD 05 の幅は東端で 2.5 m、西方で広がり 3.5 m、深さ 0.4 m である。水の流れた形跡はなく、掘削後短期間で埋め戻したと考えられる。土壙 SK 08 は SD 05 と一連のものである。

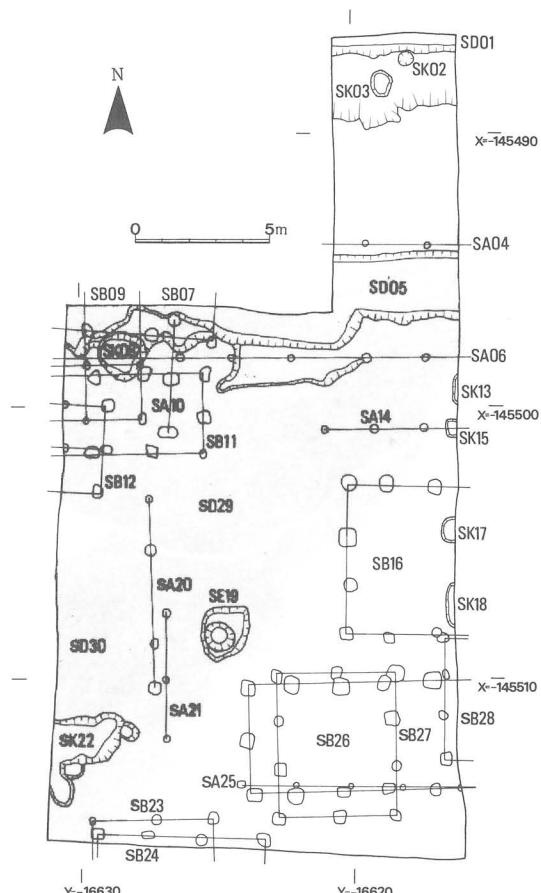
B期 一条大路南側溝 SD 01 が掘削され、九坪敷地内に掘立柱建物 SB 11・SB 23・SB 26・SB 28 と南北塀 SA 20 とが作られる。SD 01 は調査区の北端で検出したが、北肩は調査区外にあり、幅・深さとともに不明である。SB 11 は梁行 2 間・桁行 3 間以上の東西棟、SB 23 は梁行 2 間の南北棟、SB 26 は桁行 3 間、梁行 2 間の南北棟、SB 28 は桁行 3 間の南北棟になる。SB 11 の東妻柱筋は SB 23 の東側柱筋に一致し、SB 23 の北妻柱筋と SB 26 の南妻柱筋とが一致する。南北塀 SA 20 は、SB 11 の南側柱列東第 2 柱と SB 23 の北妻柱とを結ぶ線上に載る。

C期 SD 01 は存続し、掘立柱建物 SB 09・SB 16・SB 24・SB 27 と東西塀 SA 14・南北塀 SA 21・井戸 SE 19 とが作られる。SB 09 は総柱建物、SB 16 は梁行 3 間、桁行 3 間以上の東西棟、SB 24 は建物の北側部分、SB 27 は桁行 5 間以上・梁行 2 間の東西棟になる。SE 19 は径約 2 m、深さ 1.2 m の円形掘形内に設けた縦板組の井戸で、中央やや西に底板をぬいた曲物（直径 56 cm・高さ 47 cm）を据えている。

D期 SD 01は存続し、掘立柱建物SB 07・SB 12、南北塀SA 10、東西塀SA 25、土壙SK 13・SK15・SK 17・SK 18とが作られる。

以上の各時期は、出土遺物から、A期が平城京造営前の7世紀～8世紀初頭、B期が8世紀前葉、C期が8世紀中葉、D期がそれ以降と推定できる。なお、SD 01の出土遺物は平安時代に下るが、平城京造営時に掘削されたと考えられる。

遺 物 出土遺物には土器と瓦がある。土器（第21図）では、SD 05・SK08出土の土師器・須恵器（9～14）が平城宮土器I～IIの良好な一括資料である。SK 08からは製塙土器（15）も出土した。SE 19の掘形から平城宮土器II～IIIの土師器片、底の礫土から同III～IVの土師器甕（7・8）、井戸枠内から青海波当板痕のある土師器甕片が出土した。また、SA 10南端の柱掘形から9～10世紀の灰



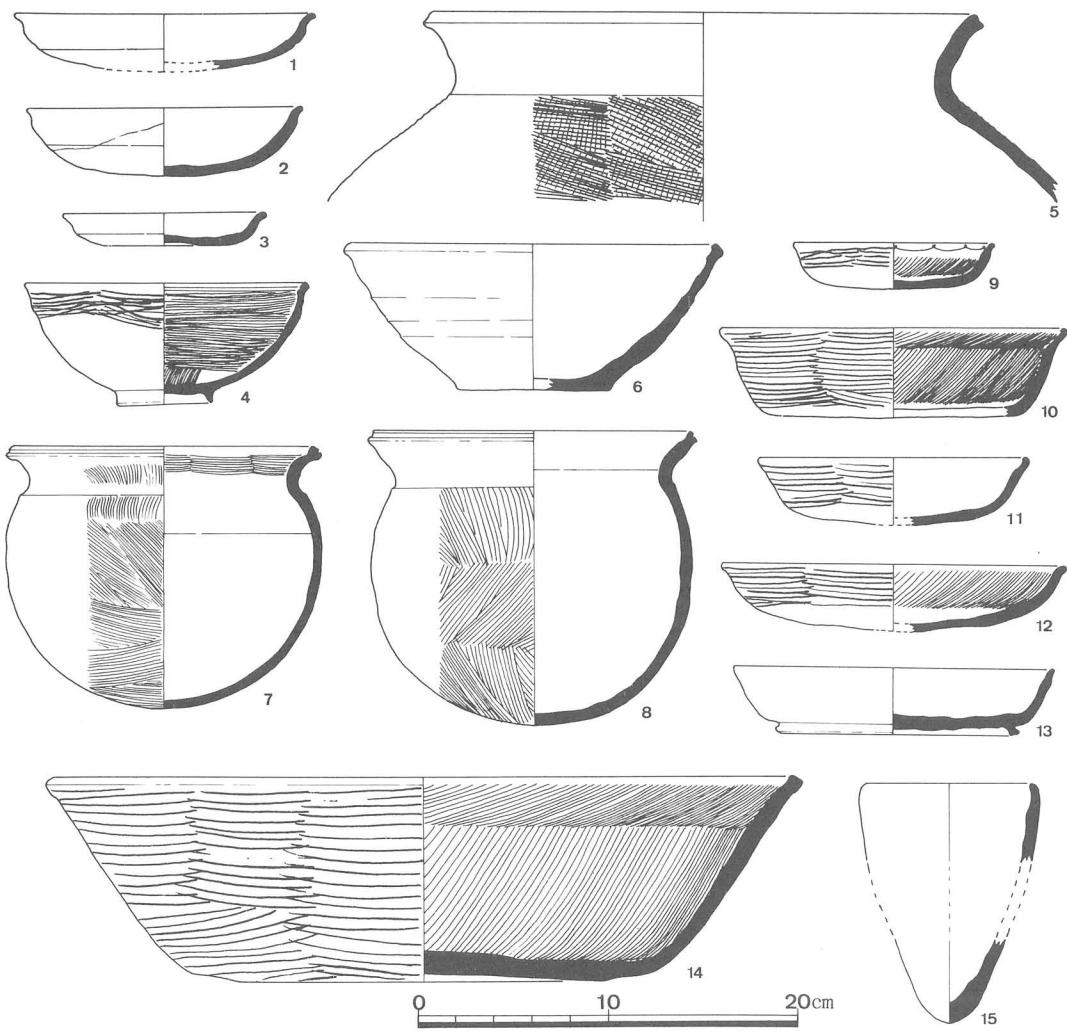
第20図 第131－16次調査遺構図

釉陶器、SK 15・SK 18・SK 19から瓦器、SD 01から12世紀前半の東播磨系須恵器甕（5）こね鉢（6）瓦器椀（4）土師小皿（1～3）が出土した。瓦は少なく軒瓦は平安時代初頭の軒丸瓦1点、時期不明の軒平瓦1点のみである。

ま と め 本調査で検出した一条大路南側溝SD 01から平安末期の遺物が出土した。これは一条大路が後世まで存続したことと一致する。SD 05は京造営以前の溝で、京造営時に埋め立てて、宅地の一部に取り込んでいる。九坪の北を区画する築地は確認できなかった。

九坪内の建物は柱間が1.5～2.1m（5～7尺）、柱掘形の一辺が約0.3～0.6mときわめて小さい。建物配置

があまり整然とせず、発掘区の東南半と西北隅に片寄るのは、旧河川 SD 32南端とSD 33中央部との砂層を意図的に避けた結果であろう。九坪の南北8等分線は、本調査区のほぼ中央にあたるが、東西方向の区画施設はない。九坪と十六坪との坪境小路・九坪の南北4等分線はともに調査区外にある。したがって、本調査区で検出したB期・C期の建物群は九坪の8分の1町以上を占める邸宅の一郭をなすと考えられるが、規模からみて中心的建物でなく、雑舎であろう。



第21図 第131-16次出土土器

5. 左京三条四坊三坪の調査（第138次）

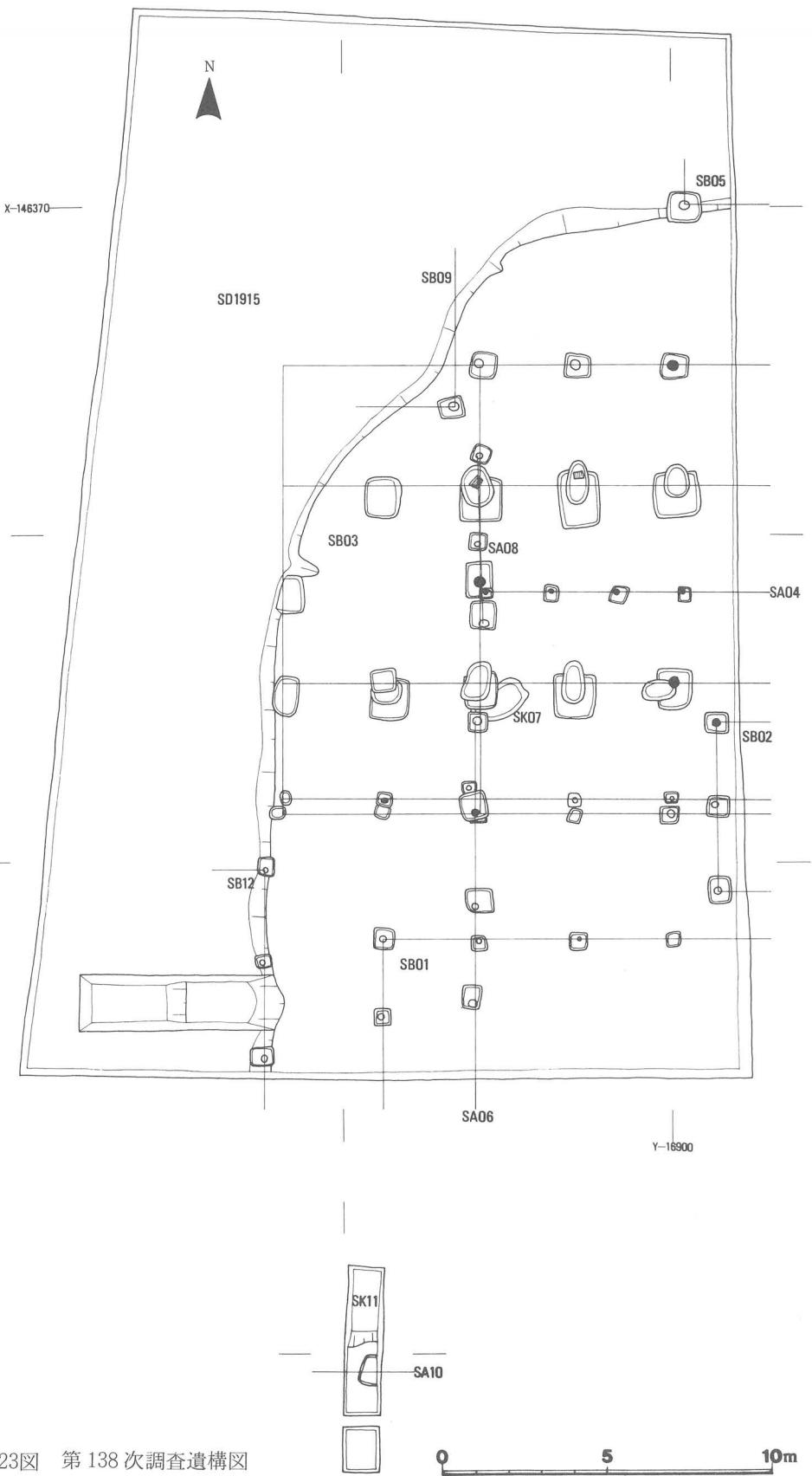
本調査はマンション建設に先立つ事前調査で、三坪内の状況、三・四坪の坪境小路の確認を目的とした。検出遺構は掘立柱建物6棟・掘立柱塀4条・土壙2基・中世河川1条である。中世河川は耕土・床土下の黄色粘土面、他の遺構はその下の青灰色粘土面で検出した。

掘立柱建物SB 01は桁行10尺等間・梁間8尺等間の東西棟。SB 02は梁間8.5尺等間の東西棟。SB 03は両面廂の東西棟で、身舎の掘形は径1mをこえ、桁行・梁間とも10尺等間で北廂は12尺、南廂は当初13尺で後に12尺に縮めている。西から2間目の建物中央の柱穴は間仕切と考えられる。東西塀SA 04は2m等間で3間分検出したが、SB 03の床束の可能性がある。SB 12は10尺等間で2間以上、SA 06は10尺等間4間以上の南北塀でSB 03より新しい。SA 08は8.5尺等間、2間の南北塀である。

SB 01とSB 03とは柱筋が一致し、SB 03が正殿、SB 01が前殿的性格をもつのである。SB 03を桁行7間とすれば、中心は三坪の東から約1/3にあたる。SB 03が広廂をもつこと、SB 03より古い土壙SK 07から奈良中頃の土器が出土したことから、奈良時代後半の建物群と考えられる。なお、南拡張区で小路北側溝は検出できなかった。SD 1951は七坪で確認した中世河川の下流である。



第22図 新大宮付近発掘調査位置一覧



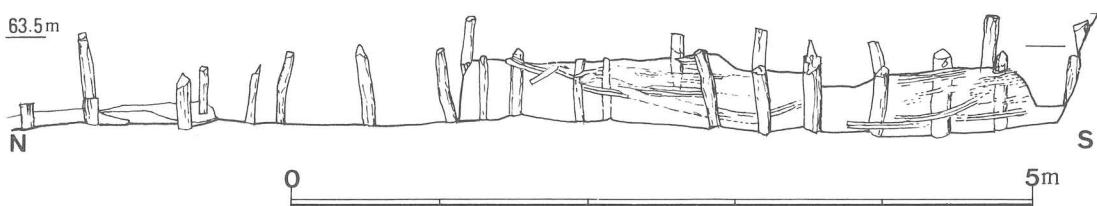
第23図 第138次調査遺構図

6. 左京三条四坊七坪の調査（第 131 – 30 次）

住宅建設にともなう事前調査である。調査地は平城京左京三条四坊七坪の西南部に相当し、東隣りは第 116 次調査、和同開珎の鋳型が出土した場所である。建物予定地の北半部は、第 116 次調査で検出した中世河川の延長にあたるので、南半部に東西 15 m、南北 15.5 m の発掘区を設けた。しかし、同調査区でも検出したのは旧河道で、奈良時代の遺構はこの河川によって大きく破壊されていた。

この中世河川の下には、縄文時代に形成された河川がある。両河川の層界凹凸の著しい不整合面であるが、縄文時代の河川堆積物は青灰色を呈し、大きな流木をふくんでいる。この流木の付近で、縄文時代後期前半の土器片が出土した。上位の砂礫層からは、磨滅した中世陶器片が出土したが、量は多くない。さきの調査では、この中世河川の岸で掘立柱建物の柱掘形を検出したが、今回の地点では浸蝕が深くおよんでおり、建物遺構は検出できなかった。

遺構として中世河川にともなう堰 1 ケ所を検出した。この堰は調査区の東南隅にあり、2 列の立杭とシガラミからなる。この堰の周囲は、粘土、砂、礫のブロックからなる乱堆積で、シガラミはそのうち青灰色粘土ブロックにあたる部分に残っていた。同じブロック土が杭の東西にまたがって堆積しているので、2 列の杭列のうち、どちらが古いのか決められなかった。河川の中央部にあたるところでは、この遺構はみあたらない。強い流れのため破壊されたのであろう。この堰は中世河川の堆積がある程度進んだ段階で設置され、杭下端が中世河川の堆積土中で止まっているものがみられた。この堰の南西では、砂礫の堆積が水平であり、東北からの乱流が、本流に直交する堰で調整されたものとみられる。



第24図 調査区東南隅で検出した堰立面図

II 平城京右京の調査

1 右京一条二坊二坪の調査（第 131 - 2 次）

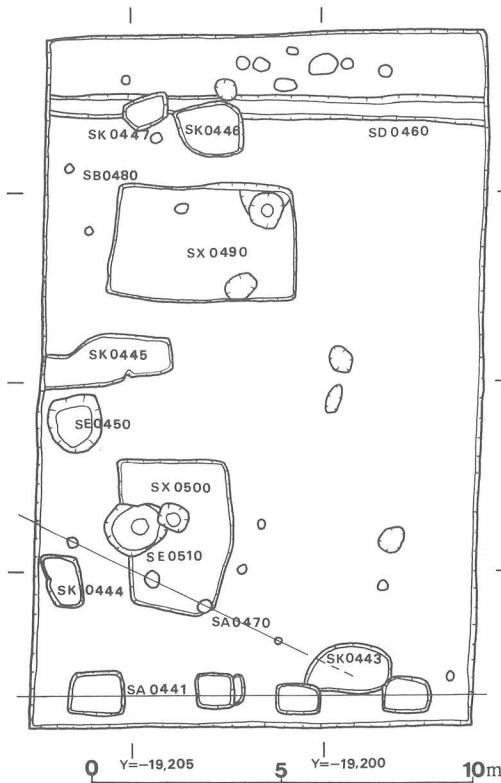
駐車場造成にともなう事前調査である。本調査区周辺では、駐車場の造成にともなう事前調査を数度にわたって行っている。その結果、北側では一条二坊一坪と二坪との坪境小路（昭和52年度、第 103 - 7 次調査）、西側では掘立柱建物数棟、二坪と七坪との坪境小路（昭和53年度、第 112 - 8 次調査）、東側では西一坊大路西側溝、二坪東辺部の築地痕跡（昭和54年度、第 118 - 29 次調査）を検出している。

今回の調査では、奈良時代の掘立柱塀・溝・土壙、古墳時代の掘立柱建物・塀・井戸、弥生時代の竪穴住居・井戸などを検出した。以下、順次解説を加える。

奈良時代の遺構　掘立柱塀 SA 0441、東西溝 SD 0460、土壙 SK 0443・0444・0445・0446・0447などがある。SA 0441は調査区南端にある掘立柱塀で、3間分を検出した。柱間寸法は 2.5 m ~ 3.0 m と不ぞろいである。SA 0441は、第 112 - 8 次調査で検出した掘立柱建物 SB 01 の南側柱筋の延長上にあたる。また、両者の距離は約 10 m と近接し、塀 SA 0441 は SB 01 に伴うものと考えられる。東西溝 SD 0460 は幅 0.8 m、深さ 0.15 m の浅い溝である。SA 0441 と SD 0460 との距離は約 15 m ある。土壙はいずれも浅く、深さ 0.2 m 程度である。

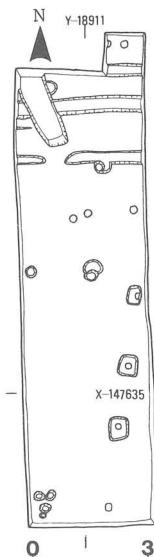
古墳時代の遺構　掘立柱塀 SA 0470、掘立柱建物 SB 0480、井戸 SE 0450などがある。SA 0470 は柱間寸法 1.8 ~ 2.5 m で 3 間分を検出した。東南方向は奈良時代の掘立柱掘形や土壙によって消滅している。柱穴は直径 0.3 ~ 0.4 m である。SB 0480 は桁行・梁行とも 1 間（2.4 × 1.8 m）の掘立柱建物である。柱穴の直径は 0.2 ~ 0.3 m である。SE 0450 は上縁径 1.5 m、底部径 0.9 m、深さ 0.75 m の井戸である。枠を抜き取った痕跡が認められないので、素掘りと思われる。出土した土器から、5世紀前半の井戸と考えられる。

弥生時代の遺構　井戸 SE 0516、竪穴住居跡 SX 0500・SX 0490 がある。SE 0510 は上縁径 1.5 m、底部径 0.4 m、深さ 1.1 m の摺鉢状の井戸である。枠



第26図 第131-2次調査遺構図

を設けた痕跡はない。埋土中から第Ⅲ様式の壺が出土した。SX 0500は南北に長い長方形の竪穴で、長辺4m、短辺2.8m、深さ0.2mである。中央やや北寄りに、上縁で0.8×0.7mの長方形、下部で直径約0.4m、深さ0.5mの土壙がある。SX 0490は東西に長い長方形の竪穴で、長辺4.6m、短辺3.1m、深さ0.2mである。東北隅に直径約1m、深さ約0.6mの土壙がある。SE 0510の掘鑿はSX 0500廃絶後なので、この竪穴は弥生時代中期以前のものである。



第25図 第131-28次
調査遺構図

2 右京六条一坊九坪の調査（第131-28次）

調査地は奈良市六条町236-2、238-2、県道大和郡山斑鳩線から東へ約200m入ったところで、住宅建設とともに事前調査である。当該地は右京六条一坊九坪の北端にあたり、敷地北側は五条大路に南接し、大路南側溝の存在が予想された。調査は開発予定地の西寄りに東西3.5m、南北12mのトレンチを設けて実施し、トレンチ北部で幅狭い3条の東西溝を検出した。南端のものは中世瓦器を含み、他は遺物がない。この範囲では大路南側溝が見当らないため、トレンチ北東隅を北へさらに1m拡張したが側溝は確認できなかった。トレンチ南半では、基準方位より北で若干東へ振れた南北方向に並んだ小柱穴3

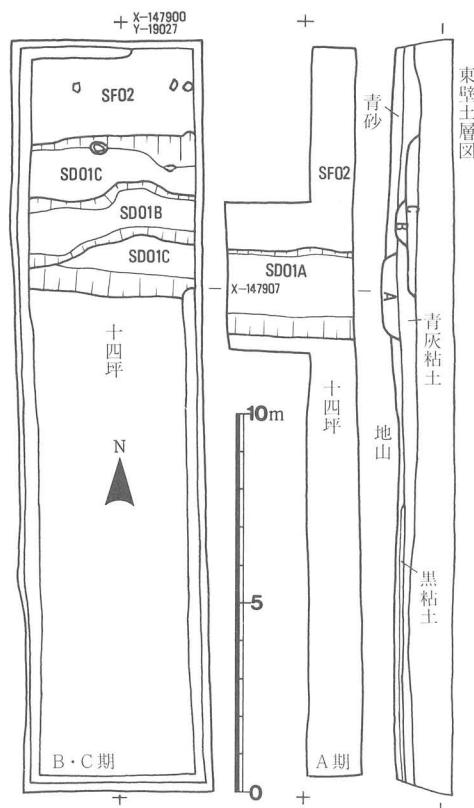
ヶを検出したが、建物の方位や規模については不明である。

3 右京六条一坊十四坪の調査（第131－9次）

奈良市西の京町104-3においておこなった駐車場造成にともなう事前調査である。調査地は平城京右京六条一坊十四坪の北辺にあたり、遺存地割から六条々間路南側溝の存在が予想された。

検出した主な遺構は、六条々間路南側溝SD 01と六条々間路SF 02である。十四坪内ではなんらの遺構も検出できなかった。条間路SF 02には、後世の削平のためか、舗装等は認められない。南側溝SD 01は3時期（A・B・C期）にわたって存廃を繰り返した。SD 01 A：表土下約1mの青色砂質土面で検出したもので、幅2.5m、深さ0.5mほどの素掘り溝である。溝内に堆積した灰色砂には奈良時代の遺物のみが含まれていた。SD 01 B：Aより1mほど北に、新たに掘削される。幅1.4～1.8mで、やや曲折がある。溝底部で黒色土器が出土した。SD 01 C：Bと同位置だが、南北に拡幅し、幅3.8～4.2mとなる。深さは約0.4m。わずかながら瓦器片を含む。SD 01 Cは青灰色粘質土を掘り込むが、青灰色粘質土の上位に堆積する暗青灰色砂質土も瓦器片を包含しており、六条々間路南側が廃絶した時期を物語っている。

出土遺物には瓦類と土器類があり、主としてSD 01から出土した。瓦には軒丸瓦6291型式1点、軒平瓦6641C型式1点、平安時代の軒丸瓦1点のほか、平箱5杯分の丸・平瓦片がある。土器類としては須恵器・土師器片が多く、合計平箱4杯、ほかに少量の黒色土器・瓦器片があり、緑釉碗、青・白磁片および製塩土器片が各1点出土している。



第27図 第131-9次調査遺構図

4 右京六条三坊四坪の調査（第 131 - 7 次）

調査地は薬師寺の西、奈良市六条町字西波 464-1 にあり、平城京の条坊では右京六条三坊四坪にあたる。本調査は南都銀行西ノ京支店建設の事前調査として実施した。文献上では右京六条三坊には、大初位赤染大岡・従七位上尋来津首丹足・国百島・茨田連典主らが居住しており、また西二坊大路を挟んで薬師寺に隣接した場所であることから、いかなる奈良時代遺構があるか興味がもたれた。

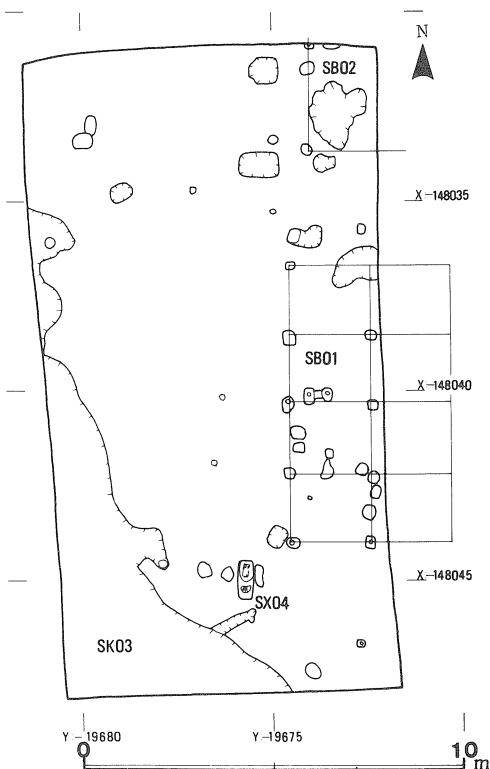
調査地の現状は、旧水田面の上に約 1 m の整地土があって、表面はコンクリートの三和面となっていた。層位は、1 整地土、2 旧耕土、3 床土、4 土器・瓦片 まじり暗灰色粘土層、5 灰白色砂岩質土層である。この第 5 層は西ノ京丘陵の基層の一部である。検出した遺構は掘立柱建物 2 棟、土壙、方形掘形などで、すべて第 5 層上面で検出した。掘立柱建物 SB 01 は桁行 4 間梁間 2 間以上の南北棟、総柱建物である。発掘区の関係から東側は未検出である。柱間は桁行が 1.8 m(6

尺) 等間、梁間 2.1 m (7 尺) である。柱掘形は一辺が 0.3 ~ 0.4 m と小さく、西側柱南 3 からは瓦器が出土した。中世の倉庫遺構であろう。

掘立柱建物 SB 02 は、SB 01 の北 3 m にある。SB 01 と主軸方位が一致することから建物としたが、塀の可能性もある。柱間は 2.1 m (7 尺)。北側の掘形から瓦器片・瓦片が出土した。

SK 03 は発掘区西南隅付近の不整形土壙である。底には凹凸があり、埋土に瓦器片・瓦片を含む。

以上、当初の予想に反して奈良時代の遺構はすでなく、検出遺構はすべて中世に属するものであった。



第28図 第 131 - 7 次調査遺構図

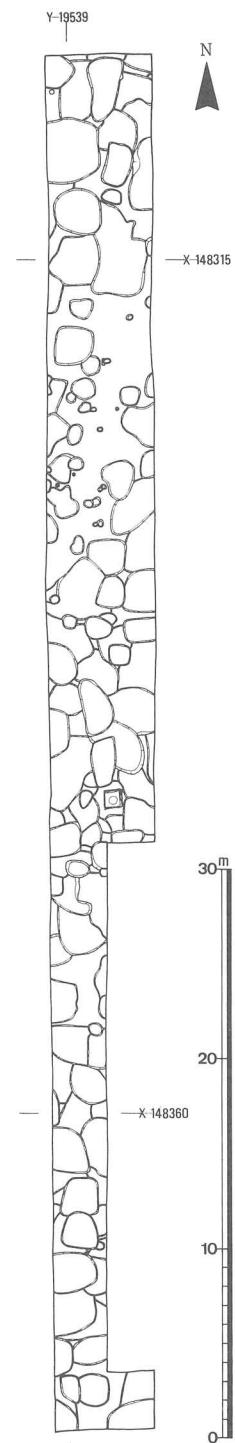
5 平城京右京七条二坊十五坪の調査（第135次）

薬師寺が、駐車場の西側、近鉄線のすぐ東側に計画した休憩所予定地の調査である。調査地は十五坪の東北部分にあたり、東西6m（南半は3m）、南北74mの調査区を設けた。今回調査区のすぐ北東部と、南東の七条条間路と坊間小路・坊間路との交差点位置とは、第124次（薬師寺駐車場予定地）として調査を行なっている。

検出した遺構は、中世井戸1の他、多数の中世土壙で、奈良時代の遺構は中世遺構によってこわされ、検出できなかつた。堆積土は水田耕土・床土下に北半では遺物包含層の灰褐色土（厚さ10~20cm）がある。灰褐色土下は自然堆積土である青灰色砂質土で、この上面が遺構検出面である。しかし、北半で一部分青灰色砂質土が残るもの、南半ではほぼ全面にわたって土壙が重複した状況であった。

調査区ほぼ中央の井戸は一辺約80cmの方形・縦板組で、底中央に、径40cmの曲物を深さ30cm程埋め込んでいた。検出面から底面まで約1mである。井戸枠のまわりは井戸より後の土壙が重複しているが、一部残る掘形から、約2mの円形掘形を推定できる。掘形・井戸埋土からは土師器・瓦器・磁器が出土し、これらは12世紀に属する。

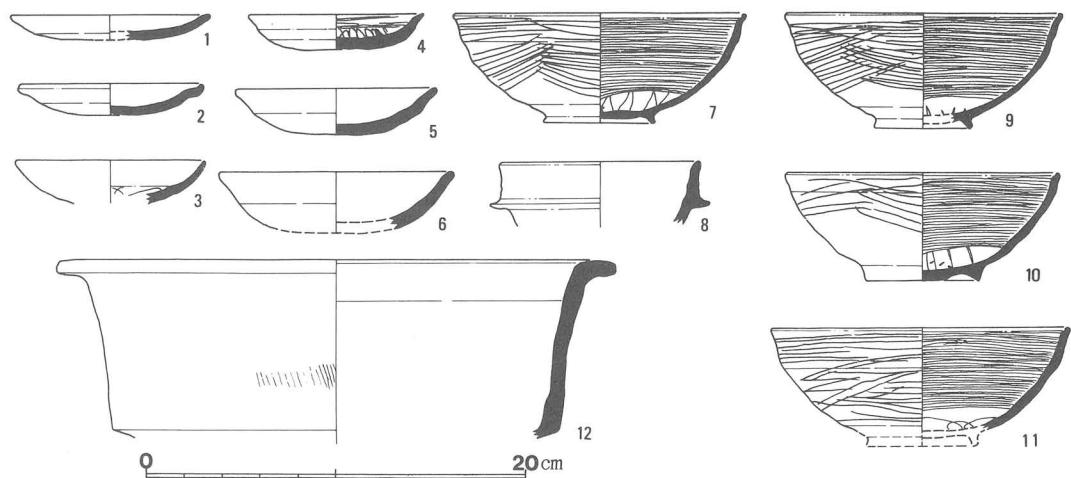
土壙は今回の調査で100以上検出し、特に南半に集中している。形状は不整円形が多く、4m以上のものから1m以下の円形をなすものもある。調査区北側の青灰色砂質土がよく残るところでは比較的小さいものがみられ、北端部・南半は長大なものが重複する。深さは北半で50cm前後であるが、南端では約1mとなる。土壙が掘り下げられた底面はほぼ平らで、いずれも青灰色粘土上面である。中には黒色粘土が一部



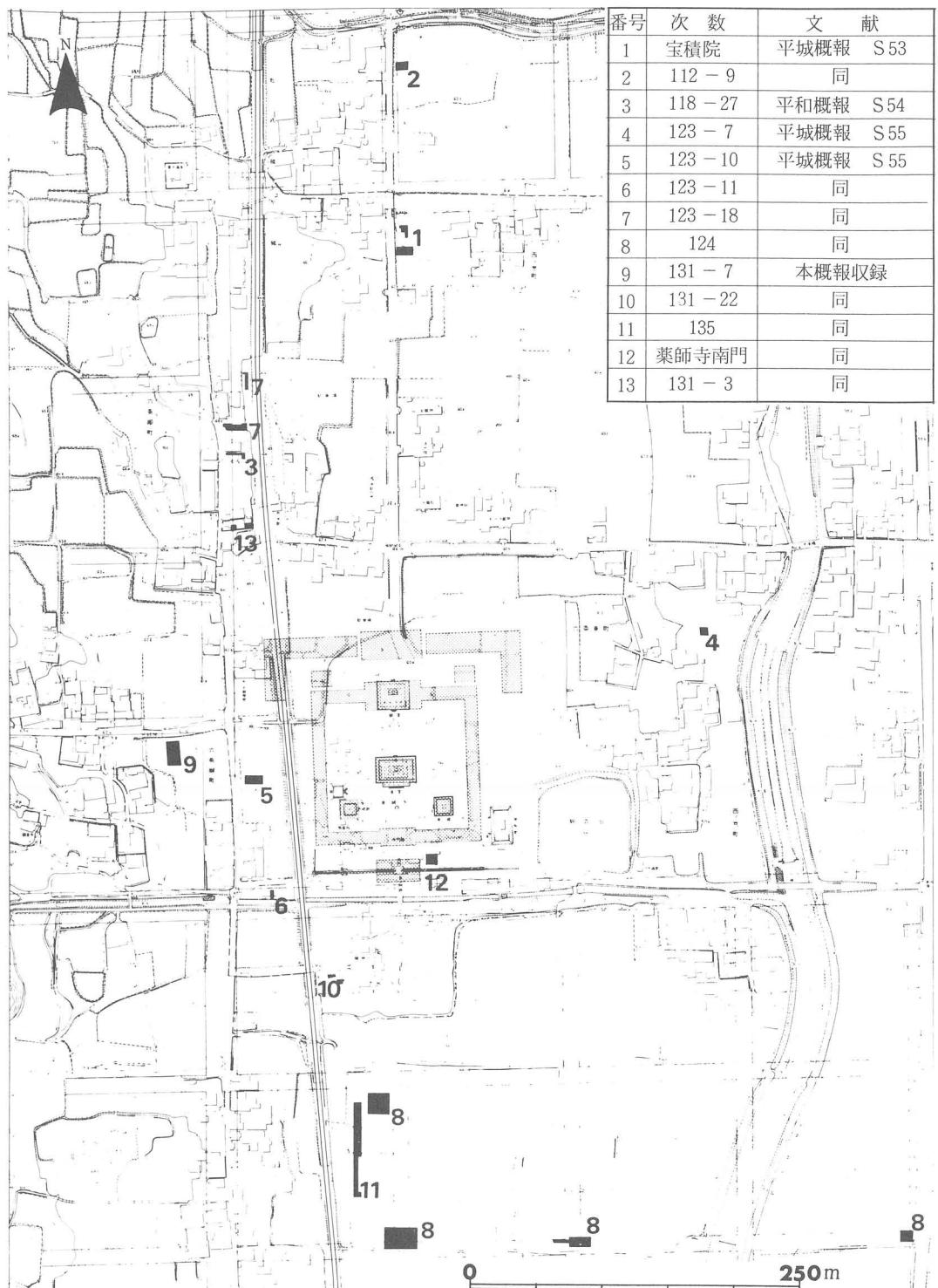
第29図 第135次
調査遺構図

分うすく残るものもある。この調査区一帯の自然堆積土は、青灰色砂質土下に厚さ10cm前後の灰色粘質土・15~20cmの黒色粘土があり、その下に青灰色粘土が厚く堆積する。土壌の深さが北と南とで異なるのは、青灰色砂質土の厚さが北側で約15cmであるのに対し、南側で30~50cmと厚いことによるものである。このようなことから、多数の土壌は黒色粘土採取のための穴であることが推定できる。黒色粘土の厚さは北側で15cm前後・南端で20cmをこえる。南側に黒色粘土が若干厚くなっていることが、土壌が集中することと関連するのかもしれない。今回調査区の南20mの条間路・坊間小路交差点地域の調査（第124次調査）でも、同様な土壌群を検出している。土壌の埋土は砂質土に粘土塊を混えたもので、土師器・瓦器・磁器が少量出土した。これらは井戸出土土器とほとんど時期差がなく、12世紀代に属する。第124次調査出土の土器類も同様の時期である。

今回の調査では奈良時代の遺構は検出できなかったが、中世の土取り穴と思われる土壌を多数検出した。同様な土壌は西市跡（第123~23次）、右京四条一坊十五坪（『奈良市埋蔵文化財調査報告書—昭和55年度』）などにみられ、秋篠川周辺一帯に分布するらしい。ただ、西市・四条一坊例の出土土器は13世紀で、薬師寺周辺とは時期が異なる。今後の調査で、粘土採取の実体を明らかにする必要があろう。なお、黒色粘土による瓦製作実験を試みたところ良好な結果を得た。



第30図 第135次調査 井戸出土土器 (1・2・5・6; 土師器、4・7~12; 瓦器、3; 白磁)



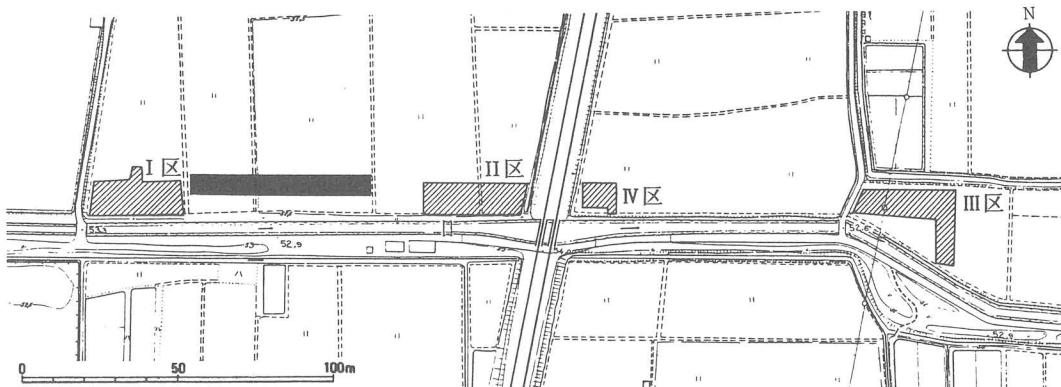
第31図 薬師寺周辺発掘調査位置一覧

6 右京九条一坊十二坪の調査（第125次補足）

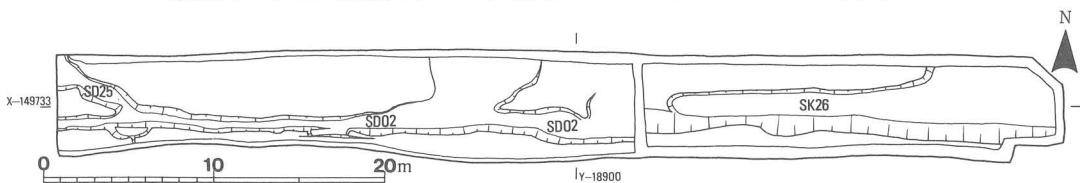
本調査は、1980年度に実施した県道城廻り線予定地の事前調査（第125次調査 奈良国立文化財研究所編『平城京九条大路—県道城廻り線予定地発掘調査概報I』 1981年3月）を補足するために行なったものである。調査地は、道路敷予定地を東流する一級河川蟹川の移転地で、前回調査時には、遺構面は保存可能と了解されていたが、工法上遺構を損壊せざるを得なくなつたため、緊急に調査を実施した。

調査区は前回の第I調査区と第II調査区の間、東西約60mの範囲である。検出した遺構は、平城京右京九条一坊十二坪の南を画する築地塀の南雨落溝と思われる東西溝SD02と発掘区西端部の斜行溝SD25である。SD02は、西半部では幅1m弱、深さ0.3m内外で、第I区検出のものとつながる。東半部においては南肩を検出したが、北側は大きく掘りこまれ、土壌状の様相を呈した（SK26）。また、斜行溝SD25の上には焼土・炭化物とともに鋳型の断片と思われる粘土塊が堆積していた。

大量の遺物がSD02およびSD25から出土した。ほとんどが丸・平瓦片で、軒瓦は軒丸瓦6272型式3点および新出型式のもの1点にすぎない。



第32図 第125次補足トレンチ位置図（I～IV区は第125次調査分）



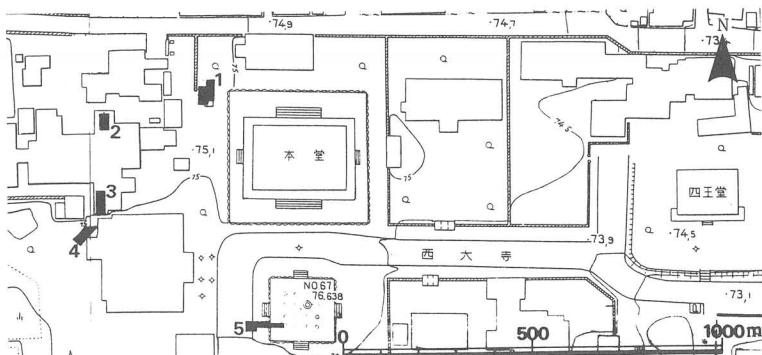
第33図 第125次補足調査遺構図

III 京内寺院の調査

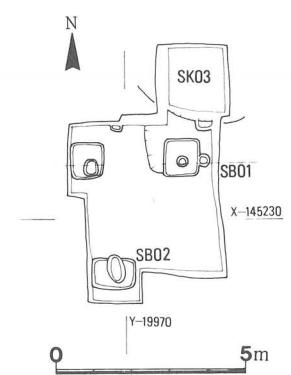
1 西大寺境内の調査

西大寺本坊の改築に先立つ事前調査を4ヶ所で行なった（第34図第1～4区）。第1区の北半は、近世の土拵で破壊されていたが、南半において表土下50cmの地山上で奈良時代の柱穴3基を検出した。いずれも建物か塀かは確認できないが、掘形は径約1mと比較的大きい。SB 01は10尺等間の東西方向1間分を検出し、いずれも柱痕跡を残していた。SB 02はSB 01と柱筋を異にし、別の構造物と考えられる。SB 02の柱は抜き取られていた。SB 01・02はともに東西両塔の北側、伽藍中軸線付近にあるので、西大寺伽藍が整った神護景雲年間（767～770）以前のものであろう。第2区では中世の土拵を検出したにとどまった。第3区下層では奈良時代の南北溝と土拵とを検出した。南北溝は西肩を確認しただけで規模は不明である。南北溝と土拵からは奈良時代中頃の土器が出土した。いずれも西大寺創建以前の宅地に関わる遺構であろう。南北溝は右京一条二坊十一坪の東西2分線の西約10mに位置する。第3区上層では室町時代の遺構を検出した。北端では整地盛土の上に石組東西溝が、南側では下層とほぼ同じ位置に南北溝が作られる。この南北溝からは円形の三彩樋木先瓦が出土した。第4区では上層で江戸時代の池が検出され、下層では奈良時代の包含層が確認された。

第1トレンチの地山面は他のトレンチに比して、0.7～1.32m高く、寺造営以前には東から西に向って低くなる旧地形が考えられる。



第34図 西大寺境内発掘調査区位置図



第35図 西大寺1区遺構図

2 西大寺東塔基壇の調査

本調査は、西大寺が計画した東塔基壇外装の修理工事に際して行なった。西大寺の東西両塔については、昭和30年の大岡実・浅野清両氏の調査によって、当初八角七重にする計画で工事を進め、途中で四角五重に変更したとする靈異記の記載が事実であることを確認している。しかし、計画変更前に八角形基壇の築成がどこまで進んでいたかは不明であった。そこで、東塔改修工事のため西階段の石とその南の基壇化粧石とが除去されたのを機に、階段の南2mの位置に東西6m・南北1.2mのトレンチを設け、さらにトレンチを東に延長し、基壇を断ち割って、その築成の状況を精査した。

遺構と遺物 現地表下0.5mで塔造営時の地表面に至る。トレンチ西端部では、その下に奈良時代の整地土A・赤褐色バラス混り土の地山Bが続く。基壇の築成工程は大別して以下の(1)～(5)の段階にわかれる。

(1)旧地表面から深さ0.5mの掘込地業を行なう。掘り込みの底は地山上面に一致し、掘り込みの肩は現基壇西端の西5mの位置にある。底に径20cmの河原石をまばらに置いた後、約0.5mの厚さに版築を行なう。版築層は2～14cmの厚さで、11～12層積み上げる。築土はやや軟弱で、築土の下半部は灰褐色土（築土C）、上半部は玉石・土器片・炭を多く含む黒灰色土（築土D）である。築土Dの上面はほぼ旧地表と一致し、最上層が掘込地業の外に若干はみ出す。築土Dの最下部で一点、最上部で2点銅錢が出土しているが、錢文不明である。

(2)続いて厚さ0.3mの版築を行なう（築土E）。築土Eの及ぶ範囲は現基壇より広いが、西限は後世の搅乱により確認できなかった。しかし、掘込地業西端から内側1.3mの範囲には築土Eは及んでおらず、(2)の作業は基壇の中心から外へ向けて行なったと考えられる。版築層は2～6cmの厚さで、11～15層積みあげており、最上面には河原石が多く散在し石敷面をなす。各層は非常に硬くつき固めてあり、全面に突棒の跡が検出された。築土は暗茶褐色土で土器片を少量含み、各層の上面には酸化鉄が沈澱し、赤褐色を呈している。築土最上層下面で銅錢1点が出土したが、錢文不明である。

(3)さらに厚さ 1.4 mの版築を行なう（築土F）。築土Fは築土Eに比べてやや軟弱で色が白い。版築層は2～8 cmの厚さで、27～37層積み上げており、細かくみれば7小工程にわかれる。各小工程による築土は20cm程度で、小工程間には暗褐色の間層が入る。築土Fの上面より 0.2 m下に玉石列を置く。

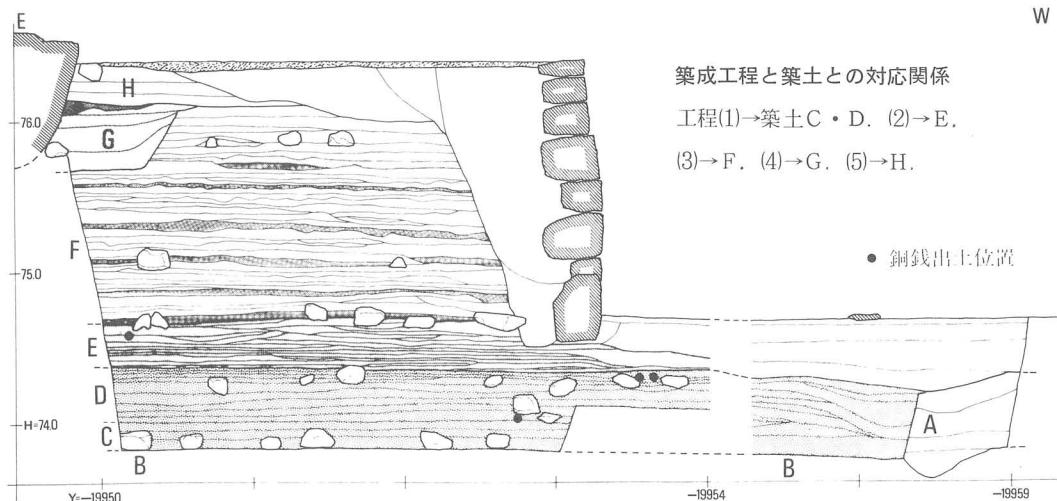
(4)深さ 0.4 mの礎石据付け穴Gを掘り、根固め石を置いて礎石を据えた後に、据付け穴を埋める。埋土最上部の濃茶褐色炭混り土の中から和銅開称片が1点と土師器片および竈の破片が出土した。

(5)さらに版築による積み上げ（築土H）を行ない土壇部分の築成を完了する。なお、現基壇の化粧石は、裏込めに多量の瓦を用いており、その年代から地覆石が室町時代以降、それより上部は江戸時代末期以降に築かれたと考えられる。

まとめ 築土EとFとは積み方・色調ともにかなり異なり、一連の作業によるものとは考えにくい。現段階の築土は基壇本体とは別の工事で、築土Eの上に載る。以上から、工程(2)までを当初の八角形基壇築成の仕事と考える。

工程(3)以降が計画変更後の仕事であり、築土・礎石ともども創建時のものである。鎮壇具の投入は、計画変更前に最低3回、変更後も最低1回行なわれている。

また、土師器片竈片の出土は鎮壇具の投入に際して、こうしたもの用いた行為が伴ったことを推測させる。



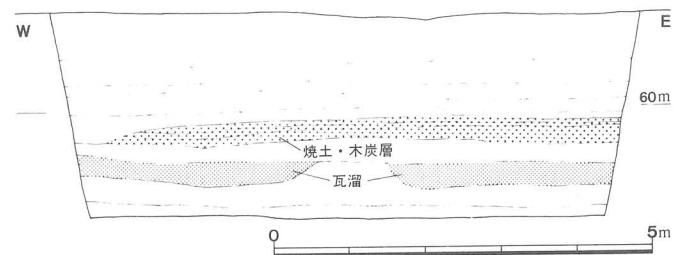
3 薬師寺南門付近の調査

薬師寺が計画した現南門周辺の環境整備にともなう事前調査である。調査地は、現南門の東西の築地塀復原予定地（第Ⅰ区）と、売札所移転地（第Ⅱ区）との2ヶ所である。

第Ⅰ区（第38図）は、創建南大門にあたるので、棟通りの礎石位置確認のため、現南門の東西に各 $2.4 \times 14\text{m}$ の調査区を設定した。創建時の門基壇は東西調査区とともに現築地塀の下ではよく残っていたが、周辺では削平されていた。棟通りの礎石位置に関しては、西側の調査区では植木の細根による搅乱のために、妻柱の根石を確認するにとどまった。東から5番目の柱位置では、礎石抜き取りに際し、根石も取り去ったと考えられる。一方、東側調査区では、礎石据付け痕跡を2ヶ所とも確認した。なお、現南門の棟通りの礎石は、新たに据え直した痕跡はなく、創建南大門の礎石を原位置のままで、西では西側を、東では東側を若干打欠いて再利用していることが判明した。したがって、創建南大門の規模は、中央3間が18尺、端間が東西ともに16尺であるという従来の調査成果が正しい。礎石の据付け方法は、現存礎石および東から1・2番目の礎石抜き取穴の断ち割りから、据付けのための掘形を掘削せず、基壇版築途上に根石で礎石を安定させ、さらに基壇版築を続行する工法をとっていることがわかった。築土は砂質土と粘質土との互層で、1層 $5 \sim 10\text{cm}$ の比較的粗い仕事である。また、築土中に創建瓦が若干量含まれており、南大門の創建は薬師寺の造営が始まった養老2年（718）よりも若干遅れると考えられる。なお、『薬師寺縁起』では、仏門（南大門）は「5間2重戸3間壁2間、長5丈広3丈2尺」と記載されている。この寸法は天禄4年（973）火災以後の再建南大門の規模を記載したのではないかとする説もあるが、本調査ではそのような痕跡は確認できなかった。

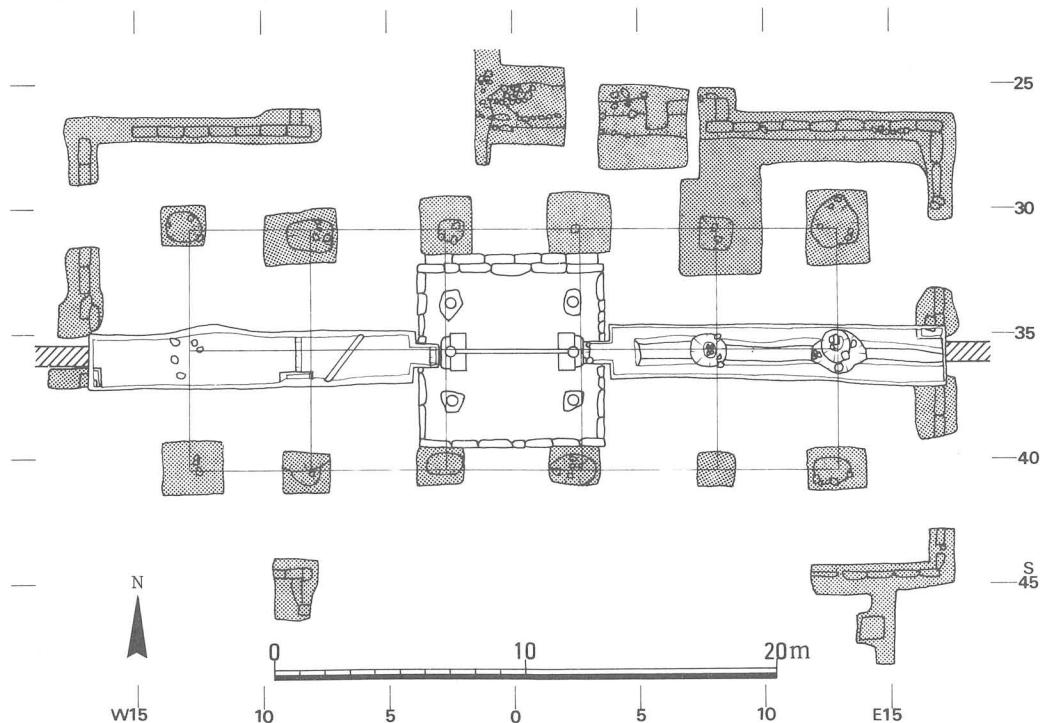
第Ⅱ区（第37図）は現南門に入った東側、回廊と築地とにはさまれた場所で、宿直屋の存在も考えられたが確認できなかった。調査区では、現地表面から -2.7m で砂質の地山に達する。地山上 20cm は植物質を含む池状の堆積で、薬師寺造営直前のこの地区の状態を示している。この堆積の中から、約 20cm の角釘7本がま

とまって出土した。この堆積上に約60cmの盛土がある。薬師寺創建に際しての整地土であろう。この整地土を掘り込んで瓦溜が形成される。瓦溜からは軒瓦約300点をはじめとする多量の瓦塼類が出土した。それ以外に、加工のある凝灰岩片・三彩陶器片・土師器片が出土している。瓦溜形成後に、約30cmの盛土整地を行っている。この後に、木炭まじりの焼土層が堆積する。焼土層からは29点の軒瓦とともに、巡方帶金具を表わしたと思われる土製品が出土した。実際の巡方よりひとまわり大きく、金箔を押した痕跡も認められるので、塑像の帶の部分と考えられる。この焼土層は天禄火災後の整地によって形成されたものであろう。焼土層から上は、廃棄した瓦を主体とした整地層で順次現代まで至っている。



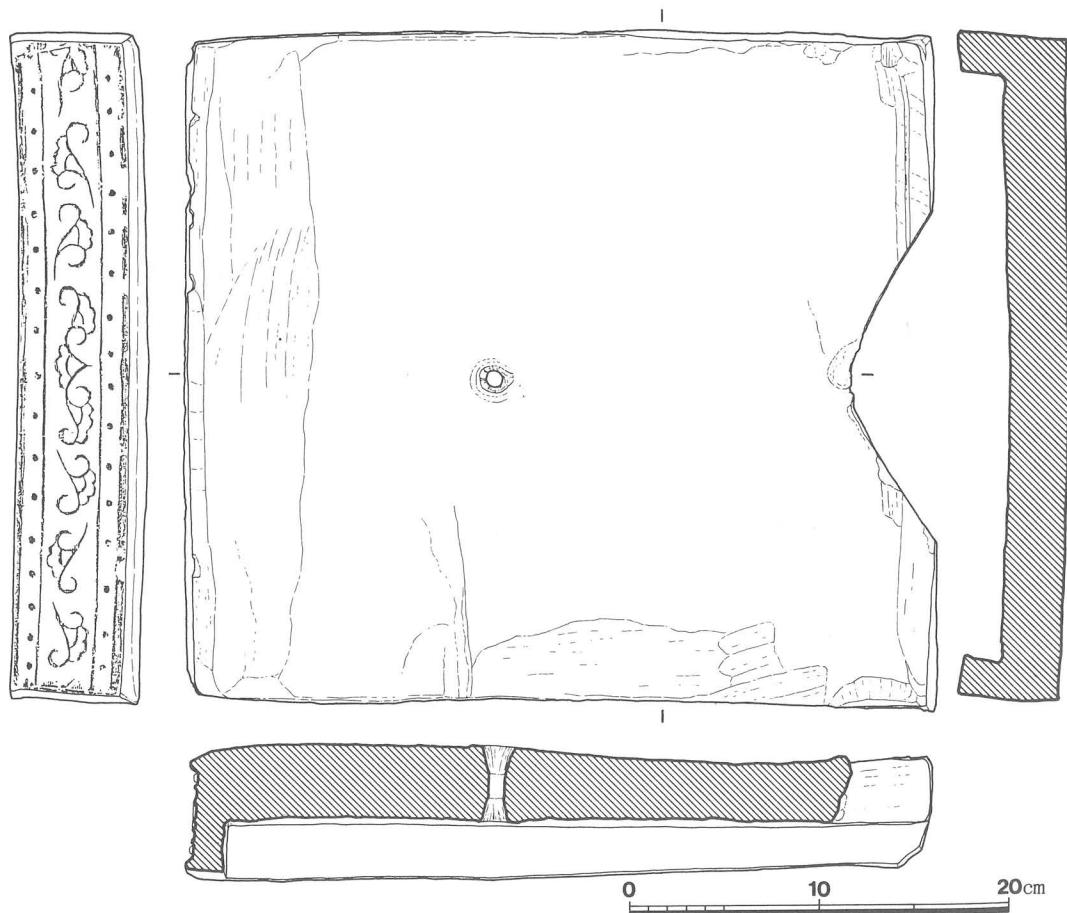
第37図 薬師寺南門東土層図（北壁）

瓦溜から出土した軒瓦は、



第38図 薬師寺南門調査遺構図（アミ部分は1954年調査）

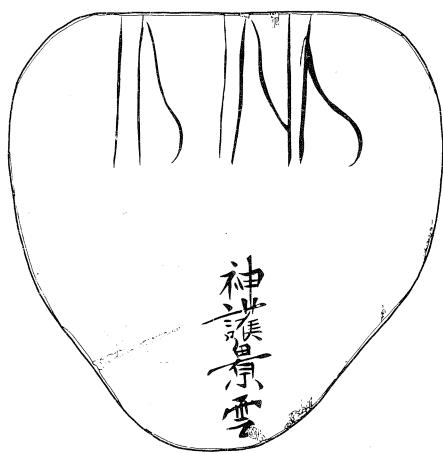
約80%が創建時の本薬師寺式、約15%が平城宮系のもので、平安時代の復古瓦を若干量含む。道具瓦としては完形の隅木蓋瓦が出土している。おそらく、創建南大門の隅木を飾っていたものであろう。瓦溜から出土した土師器は10世紀後半代のものである。また、瓦溜から出土した多量の凝灰岩片は基壇化粧材と考えられ、10世紀後半代に薬師寺において屋根の葺替や基壇化粧の修築をはじめとする大規模な伽藍修理を行なった可能性が強い。瓦溜上の整地は修理後の粧い新たになつた伽藍にともなうものであろう。しかし、整地土直上に天禄火災の焼土層が認められることは、大修理からそれほど時間を経ずに、新装伽藍の大半が灰燼に帰したことを示すのであろう。



第39図 薬師寺出土隅木蓋瓦

次 数	調査位置と調査目的	検 出 遺 構	出 土 遺 構
第 131 － 3 次	薬師寺西南大垣(第 118-27・ 123-18次調査地の南延長上)	旧整地土の確認	瓦片
4	左京五条一坊十四坪東一坊大 路西側溝の検出	顕著な遺構なし(路面敷か)	土器片・瓦片
5	水上池の旧汀線 } の検出 大蔵省関係遺構	同	同上
6	右京一条二坊三坪 西一坊大路西側溝の検出	旧耕土下 0.5 m で地山 柱穴 4 (掘立柱建物 2 棟分?)	土器片
11	外京五条大路に南接する地域	表土下 1.5 m で地山 顕著な遺構なし	ナシ
12	右京五条一坊十二坪 西一坊間路西側溝の検出	旧耕土下約 0.6 m で地山 円形土壙 1 小ピット 1	ナシ
17	大乗院旧境内西南部で園池 の池尻方向にあたる	江戸時代の石列・東西溝 中・近世の整地土	重圈文軒丸瓦・平安 末の唐草文軒平瓦 土師器・須恵器 他
18	右京三条二坊八坪の宅地 遺構	河川による浸蝕を受けており、 顕著な遺構なし	ナシ
19	二条大路と東三坊大路の 交差点	中世河川による浸蝕のため、顕著 な遺構なし	中世土器片
21	右京五条三坊二坪の宅地 遺構の検出	表土下約 25 cm で地山 中世土壙・南北溝	軒丸瓦 6304 型式 1 中・近世瓦 中・近世土器
22	薬師寺八幡宮の南廊西端と 楼門位置の確認	八幡宮関係遺構は削平されており、 奈良時代包含層あり	軒丸瓦 6307 型式 1 須恵器・土師器片・ 中世土器
25	左京一条二坊内の小路と北 側溝の検出	旧耕土下すぐに地山で、顕著な 遺構なし	ナシ
26	右京八条四坊一・二坪の坪 境小路北側溝の検出	旧耕土下 1 m 以下は中世以降の河 川による砂堆積	瓦片・土器片
27	北一条大路と西一坊大路と の交差地点	北一条大路南側溝位置で東西大溝 南肩を検出 (第 103-16次の SD140 の延長)	軒丸瓦 6307 型式 1 瓦片・中世土器
32	市庭古墳の東北方	表土から 30~45 cm で地山 細溝 1 土壙 1 中世包含層	中世土器片
33	海竜王寺の南・法華寺の西 東二坊大路に東接	奈良時代柱穴 1 土壙 3 溝 3 小ピット 3	三彩陶片 土師器・須恵器 黒色土器 A

本文未収録の平城京内発掘調査地の概要



若犬養門前の二条大路北側
溝出土人面墨画復原図 ½

昭和56 平城宮跡発掘調査部
年 度 発掘調査概報

1982年5月31日発行
編集 奈良国立文化財研究所
印刷 共同精版印刷株式会社